

2021 年 日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞

受賞者紹介

日本建築仕上学会

2021年 日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞

2021年 日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞の選考経緯

日本建築仕上学会の学会賞・奨励賞は1992年に発足し、本年で30年目となる。本年の選考は、2020年6月の理事会で承認された選考委員による2回の委員会で行われた。

また、2019年より奨励賞の賞名を分かり易くするために、修士論文賞・卒業研究賞・修士設計賞・卒業設計賞とそれぞれ変更された。

第1回の選考委員会では、各賞の選考作業を公平かつ円滑に行うために、「功績賞・論文賞・技術賞・技能賞・論文奨励賞選考WG」、「作品賞選考WG」および「修士論文賞・卒業研究賞・修士設計賞・卒業設計賞選考WG」の3つのWGを設置し、その主査および委員を選出した。なお、技術開発賞については、本会「学術委員会」より候補者を選考するものとした。

次に表彰規程の確認をした。また、功績賞・論文賞・作品賞・技術賞・技能賞・論文奨励賞の候補者推薦締切日を2020年11月6日、技術開発賞・修士論文賞・卒業研究賞・修士設計賞・卒業設計賞の候補者推薦締切日を2021年2月25日と定め、選考作業スケジュール、各WGへの作業依頼、学会誌「FINEX」(9/10月号)に掲載する応募要項ならびに法人正会員(団体)への推薦依頼状について検討した。

第2回の選考委員会では功績賞、論文賞、作品賞、技術賞、技術開発賞、技能賞、論文奨励賞、修士論文・卒業研究賞および修士設計・卒業設計賞の候補者について最終審査を行った。

各選考WGにおける選考経過の概要は以下の通りである。

功績賞・論文賞・技術賞・技能賞・論文奨励賞選考WGは3回開催された。

学会誌「FINEX」および学会ホームページによる公募ならびに法人正会員(団体)への推薦依頼に対して、締切までに各賞合わせて20件の応募があった。これに学会賞選考WGから推薦のあった候補者を加えた24件について審査することとした。

各候補者に担当委員を選定し、推薦書・審査資料に基づいて厳正に審査を行った。その結果、功績賞1名、論文賞2名、技術賞3名、技能賞16名、論文奨励賞2名を最終候補者として選考委員会に報告した。

作品賞選考WGは現地実査を含め5回開催された。

学会誌「FINEX」および学会ホームページによる公募を行ったところ、応募作品が1作品あった。さらに選考WGの委員からの推薦13作品について審査することとした。

書類審査の結果、候補を3作品に絞り審査を行った。その上で現地調査又はwebヒアリングを行い、さらに審議の結果、1作品3名を作品賞・建築部門、もう2作品4名を作品賞・住宅部門の候補作品として選考委員会に報告した。

技術開発賞については、学術委員会にて審議の結果、これまでに実施された受託研究の成果物から、建築仕上に関する独創的かつ優れた技術上の業績を挙げた3件4名の候補者を選考委員会へ報告した。

修士論文・卒業研究賞および修士設計・卒業設計賞選考WGは2回開催された。学会誌「FINEX」による公募の他、2021年1月教育機関に所属する本会会員にその推薦を依頼した。応募論文数は、修士論文賞9編9名、卒業研究賞11編15名、卒業設計賞1作品1名であり、これらの20論文ならびに1作品について、それぞれ2名の審査員により、所定の審査規程に基づいて公正かつ厳正な審査を行った。

その結果、高い評価を得た修士論文9編、卒業研究論文11編、卒業設計1作品を候補

として選考委員会に報告した。

以上、各WGならびに学術委員会からの報告を受け、学会賞・奨励賞選考委員会で審議の結果、2021年日本建築仕上学会学会賞候補者は、功績賞が河辺 寿正君の1名、論文賞が大宮 喜文君、増田 隆行君の2名、作品賞・建築部門が中藤 泰昭君、高岩 遊君、今村 水紀君の1作品3名、作品賞・住宅部門が鈴木 亜生君及び末光 弘和君、末光 陽子君、田中 建蔵君の2作品4名、技術賞が高栄 正樹君、島村 浩行君、近藤 旭君の3名、技術開発賞が栗秋 裕次君、横井 弘喜君、松村 康弘君、北川 将司君の3件4名、技能賞が薄井 勝君、東 平和君、大久保 隆康君、前田 光弘君、上銘 安男君、稲津 一也君、中村 好美君、菅野 勲君、米満 泰二君、宮木 康吉君、天田 裕之君、古谷 武徳君、鈴木 淳君、山口 雅人君、坂田 弘明君、瀧野 雄太郎君の16名、論文奨励賞が山本 正人君、中田 清史君の2名となった。

また、奨励賞候補者は修士論文賞が曾 明耀君、中垣 琴葉君、東 優太郎君、小笠原直哉君、鈴木 実佳君、錦木 健二君、渡辺 恭子君、宮部 あづさ君、川口 莉穂君の9名、卒業研究賞が菅井 新太君、高間 健太君、住本 賢志君、北林 崇君、辻 峻人君、齋藤 毅君、恒成 泉君、長塚 友汰君、坂井 青葉君、沖宗 律子君、和田 健四郎君、真砂 哲也君、浅葉 拓弥君、今関 幹君、刀称 龍平君の15名、卒業設計賞が三浦 隆哲君の1名となった。

以上の経過を理事会に報告し承認を受けて、2021年日本建築仕上学会学会賞・奨励賞が決定した次第である。

2021年3月9日

学会賞・奨励賞選考委員会	功績賞・論文賞・技術賞・技能賞・論文奨励賞選考WG
委員長 野口 貴文	主 査 宮内 博之
副委員長 安達 和男	委 員 大岡 督尚
〃 宮内 博之	〃 岡本 肇
委 員 北垣 亮馬	〃 古賀 純子
〃 岡本 肇	〃 佐藤 幸恵
〃 川口 とし子	〃 滝口 尚志
〃 古賀 純子	〃 真野 洋三
	〃 村木 克彦

作品賞選考WG	修士論文賞・卒業研究賞・ 修士設計賞・卒業設計賞選考WG
主 査 安達 和男	主 査 北垣 亮馬
委 員 天野 彰人	委 員 石原 沙織
〃 川口 とし子	〃 井上 照郷
〃 北垣 亮馬	〃 大塚 秀三
〃 小西 敏正	〃 河辺 伸二
	〃 田村 雅紀
	〃 寺西 浩司
	〃 藤本 郷史
	〃 濱崎 仁
	〃 横井 健
	〃 渡部 憲

2021年 日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞 受賞者

賞

番号

受賞者(ふりがな)／所属

業績名

推薦者

学会賞

功績賞

第2021-1号

河辺 寿正(かわべ としまさ)／スズカファイン株式会社

建築用仕上塗材・塗料の開発と普及及び業界活動に関する功績

日本建築仕上材工業会

論文賞

第2021-2号

大宮 喜文(おおみや よしふみ)／東京理科大学

防耐火構造に関わる被覆及び内外装の火災安全性能評価に関する一連の研究

日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞選考委員会

第2021-3号

増田 隆行(ますだ たかゆき)／株式会社安藤・間

伝統木造に使用する塗装材・屋根材に関する一連の研究

日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞選考委員会

作品賞・建築部門

第2021-4号

中藤 泰昭(なかとう やすあき)／大成建設株式会社 設計本部

高岩 遊(たかいわ ゆう)／大成建設株式会社 設計本部

今村 水紀(いまむら みずき)／大成建設株式会社 設計本部

La・La・Grande GINZA

日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞選考委員会

作品賞・住宅部門

第 2021-5 号

鈴木 亜生（すずき あせい）／ASEI 建築設計事務所
SHIRASU／桜島

日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞選考委員会

作品賞・住宅部門

第 2021-6 号

末光 弘和（すえみつ ひろかず）／株式会社 SUEP

末光 陽子（すえみつ ようこ）／株式会社 SUEP

田中 建蔵（たなか けんぞう）／株式会社 SUEP

淡路島の住宅

日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞選考委員会

技術賞

第 2021-7 号

高栄 正樹（たかえ まさき）／日本ペイント株式会社

建築用仕上塗材の製品開発及び標準化活動と技術者育成への貢献

日本建築仕上材工業会

第 2021-8 号

島村 浩行（しまむら ひろゆき）／田島ルーフィング株式会社

メンブレン防水技術の調査研究・普及啓蒙並びに防水業界の技術向上に対する貢献

一般社団法人日本防水材料協会

第 2021-9 号

近藤 旭（こんどう あきら）／株式会社マルシン

建築用金属材料の工場塗装における品質確保と環境配慮の実践及び

工業会への多大なる貢献

アルミニウム合金材料工場塗装工業会

技術開発賞

第 2021-10 号

栗秋 裕次（くりあき ゆうじ）／株式会社 L I X I L

横井 弘喜（よこい ひろき）／一般社団法人全国タイル業協会

タイル張り仕上げに関する技術開発並びに関連指針類作成に対する貢献

日本建築仕上学会 学術委員会

第 2021-11 号

松村 康弘（まつむら やすひろ）／株式会社ダイフレックス

1成分形ウレタン樹脂とアンカーピンを組合せた外壁複合改修工法の性能評価と
仕様確立に対する貢献

日本建築仕上学会 学術委員会

第 2021-12 号

北川 将司（きたがわ まさし）／大日本塗料株式会社

建築用アルミニウム材料に対する粉体塗装の実験的評価および塗装仕様の
標準化に対する貢献

日本建築仕上学会 学術委員会

技能賞

第 2021-13 号

薄井 勝（うすい まさる）／薄井工業株式会社

A L C パネル工事における施工技術の向上及び後進技能者への指導・育成に
対する貢献

一般社団法人 A L C 協会

第 2021-14 号

東 平和（ひがし ひらかず）／有限会社東瓦工業

瓦の持つ耐久性に応じた地震・台風に対する施工技能と技術に対する貢献

一般社団法人全日本瓦工事業連盟

第 2021-15 号

大久保 隆康（おおくぼ たかやす）／小野建株式会社

A L C パネル工事における若手育成並びに建設産業への貢献

一般社団法人 A L C 協会

第 2021-16 号

前田 光弘（まえだ みつひろ）／中村表装株式会社

壁装仕上げ工事における技能の向上及び継承の推進に関する貢献

一般社団法人日本壁装協会

第 2021-17 号

上銘 安男（じょうめい やすお）／株式会社日本ビルサービス

富山県における技能検定の推進と後進の育成に対する貢献

日本樹脂施工協同組合

第 2021-18 号

稲津 一也（いなつ かずや）／大正技建株式会社

建築・土木構造物の改修技術の研鑽と技能検定への貢献

日本樹脂施工協同組合

第 2021-19 号

中村 好美（なかむら よしみ）／佐藤興業株式会社
塗装技能及び施工管理技術の向上と後進の育成に対する貢献
一般社団法人日本塗装工業会

第 2021-20 号

菅野 勲（かんの いさお）／マルカン工業有限会社
宮城県における下地補修施工技術の普及に対する貢献
コニシシステム工業会

第 2021-21 号

米満 泰二（よねみつ たいじ）／誉産業株式会社
熊本県など九州地方における外壁改修技術の向上と外壁複合改修構工法の
普及拡大への貢献
全国ビルリフォーム工事業協同組合

第 2021-22 号

宮木 康吉（みやき やすよし）／株式会社宮木商会
塗装工事における廃棄物低減と工事の効率化による貢献
全国マスチック事業協同組合連合会

第 2021-23 号

天田 裕之（あまだ ひろゆき）／リノ・ハピア株式会社
外壁複合改修構工法を含む外壁改修技術の品質確保及び耐久性の検証に対する貢献
全国ビルリフォーム工事業協同組合

第 2021-24 号

古谷 武徳（ふるや たけのり）／株式会社北村塗装店
塗装現場における施工品質の向上と後進の育成に対する貢献
一般社団法人日本塗装工業会

第 2021-25 号

鈴木 淳（すずむら あつし）／株式会社ロイカ
ALCパネル工事における施工品質と安全の追求及び他の技能者への
水平展開に関する貢献
一般社団法人ALC協会

第 2021-26 号

山口 雅人（やまぐち まさと）／第一美研興業株式会社
塗装工事における人的ネットワークを基礎とした緻密な施工管理による貢献
全国マスチック事業協同組合連合会

第 2021-27 号

坂田 弘明（さかた ひろあき）／株式会社小林創業
建築工事現場における仕上げ品質の向上と安全管理に対する貢献
一般社団法人日本塗装工業会

第 2021-28 号

瀧野 雄太郎（たきの ゆうたろう）／呉光塗装株式会社
塗装工事における的確な工法選択による工期短縮の貢献
全国マスチック事業協同組合連合会

論文奨励賞

第 2021-29 号

山本 正人（やまもと まさと）／株式会社竹中工務店
有機系下地調整塗材と外装タイル接着剤張り工法に関する研究
日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞選考委員会

第 2021-30 号

中田 清史（なかだ きよふみ）／国立研究開発法人建築研究所
屋外曝露試験によるコンクリート内部の水分状態に及ぼす仕上塗材の影響に関する研究
日本建築仕上学会 学会賞・奨励賞選考委員会

奨励賞

修士論文賞

第 2021-50 号

曾 明耀（そう みんよう）／明治大学大学院
RC 建築物の耐用年数に及ぼす仕上塗材の躯体保護効果
小山 明男

第 2021-51 号

中垣 琴葉（なかがき ことは）／名古屋工業大学大学院
帯電した建築材料の花粉吸着性能及び再飛散防止性能に関する研究
河辺 伸二

第 2021-52 号

東 優太郎（あずま ゆうたろう）／北海道大学大学院
版築－鉄骨複合構造を目指した版築の特性に関する研究
北垣 亮馬

第 2021-53 号

小笠原 直哉（おがさわら なおや）／東京都市大学大学院
スマートフォン内蔵カメラを用いた屋内空間の簡易三次元復元手法に関する研究
佐藤 幸恵

第 2021-54 号

鈴木 実佳（すずき みか）／千葉工業大学大学院
ウレタンゴム系塗膜防水層のトップコートの耐疲労性
石原 沙織

第 2021-55 号

錦木 健二（にしきぎ けんじ）／名城大学大学院
フライアッシュのコンクリート用混和材への利用拡大に関する研究
道正 泰弘

第 2021-56 号

渡辺 恭子（わたなべ きょうこ）／東京理科大学大学院
端島環境下における亜硝酸リチウムによる鉄筋腐食抑制方法に関する研究
今本 啓一

第 2021-57 号

宮部 あづさ（みやべ あづさ）／東京理科大学大学院
高強度コンクリートの爆裂現象における含水状態と鉄筋拘束の影響
兼松 学

第 2021-58 号

川口 莉穂（かわぐち りほ）／広島大学大学院
センシング技術を用いた非構造建築部材の定量的評価手法の提案
大久保 孝昭

卒業研究賞

第 2021-59 号

菅井 新太（すがい あらた）／明治大学
SDGs 時代における建築廃棄物処理適正化に関する研究
～アンケートによる実態調査を中心として～
小山 明男

第 2021-60 号

高間 健太（たかま けんた）／名古屋工業大学
仮設足場用養生シートの色による内部空間の改善
河辺 伸二

第 2021-61 号

住本 賢志（すみもと けんじ）／北海道大学
骨材が遷移帯形成に及ぼす影響とナノインデンテーション法を用いた弾性率の測定
北垣 亮馬

第 2021-62

北林 崇（きたばやし しゅう）／大阪工業大学
辻 峻人（つじ りょうと）／大阪工業大学
齋藤 毅（さいとう つよし）／大阪工業大学
恒成 泉（つねなり いずみ）／大阪工業大学
土壁の仕上げにおける引きずりに関する研究
中村 成春

第 2021-63 号

長塚 友汰（ながつか ゆうた）／芝浦工業大学
環境側面からみた屋根材料の性能評価に関する研究
濱崎 仁

第 2021-64 号

坂井 青葉（さかい あおば）／工学院大学
遺産的建築物における高品位木摺漆喰天井の漆喰部力学抵抗性および剥離性状
田村 雅紀

第 2021-65 号

沖宗 律子（おきむね りつこ）／九州大学
内装壁紙の紫外線劣化による変色と清掃用薬剤の関係についての研究
土屋 潤

第 2021-66 号

和田 健四郎（わだ けんしろう）／宇都宮大学
浸水害を想定した建築用断熱材の乾燥速度分析
藤本 郷史

第 2021-67 号

真砂 哲也（まさご てつや）／日本大学
木目模様仕上げにおけるせき板の転用がコンクリート表面の仕上がり状態に及ぼす影響
荒巻 卓見

第 2021-68 号

浅葉 拓弥（あさば たくや）／東京理科大学
低アルカリ活性化モルタルの耐久性に関する基礎的研究
兼松 学

第 2021-69 号

今関 幹（いまぜき もとぎ）／日本大学
刀称 龍平（とね りゅうへい）／日本大学
建設分野におけるレーザの適用に関する研究
永井 香織

卒業設計賞

第 2021-70 号

三浦 隆哲（みうら たかあき）／東京大学

エアロゲルの建築的可能性を探る

野口 貴文

功績賞

河辺 寿正君

建築用仕上塗材・塗料の開発と普及及び業界活動に関する功績

河辺寿正君は、1978年4月スズカファイン（株）入社後、主として建築用塗料・仕上塗材の製品開発に40年以上従事し、可とう形改修塗材や高耐候性、低汚染性等の機能性上塗材、高日射反射率塗料の開発に携わってきた。また、アスベスト問題やホルムアルデヒド等室内環境問題に取り組み、製品開発でこれらの環境問題に対応してきた。さらに、高耐候性塗料の開発、塗料の水溶性化、各種環境対策、高日射反射率塗料の普及は、SDGsの取り組みに対応しており、業界の発展に繋がっている。

同君の業界における主な活動及び業績は以下の通りである。

(1) 日本建築仕上材工業会における活動と業績

同君は1999年から日本建築仕上材工業会の技術委員として活動し、仕上塗材の普及・広報活動、規格化等に努めてきた。2013年からは日本建築仕上材工業会理事（2013年副会長を1年間務める）、及びNPO法人湿式仕上技術センター理事（2017年から副理事長として現在に至る）として、工業会の運営と仕上塗材の普及・広報に努めてきた。最近ではアスベスト問題に対して工業会として講演会を開催するなど啓蒙活動を積極的に行っている。2003年3月に改正されたJIS A 6090においては改正原案作成委員会に委員として出席し、「微弾性フィラー」と呼ばれる下塗材料の標準化が必要との判断から規格案を作成し、「可とう形改修塗材」として規格に加えた。また、ホルムアルデヒドが放散する恐れのある原料の使用を禁止した規格案を作成し、ホルムアルデヒド放散問題に対応した。

建築用仕上塗材の普及のため、業界に携わる新人教育用の読本としても利用できるハンドブックの刊行を技術委員会に提案、技術委員会で原案作成を行い、2007年9月「建築用仕上塗材ハンドブック」として刊行した。このハンドブックは各方面で利用され、2016年に改訂されている。研究面では日本建築仕上材工業会が（国研）建築研究所と共同研究した遮熱塗料研究会にスズカファイン（株）として参画し、高日射反射率塗料の調査・研究に協力した。

(2) 日本建築仕上学会における活動

1999年～2000年に行われたALC外壁補修工法研究委員会に日本建築仕上材工業会から代表として参加し、ALC外壁補修工法研究委員会指針案の作成に携わり、「塗り仕上げ材」に関する章を担当し、仕上塗材の普及に努めた。また、2006年にはスズカファイン（株）として「“塗装による電磁波シールド工法”電磁波シールド層を有する内装塗装仕様の確立」として大会学術講演会で発表した。

(3) その他の業界団体での活動

2008年～2017年（一社）日本塗料工業会技術委員会に出席し、建築塗料等の普及、広報など業界の発展に努めた。現在も日本建築仕上材工業会等を通して、建築塗料・仕上塗材の普及、工業会の発展に貢献している。

よってここに、日本建築仕上学会賞の功績賞を贈るものである。

論文賞

大宮 喜文君

防耐火構造に関わる被覆及び内外装の火災安全性能評価に関する一連の研究

大宮喜文君は、東京理科大学大学院において建築火災安全工学に関する研究を進め、建築物を構成する区画部材等を考慮した火災性状予測手法に関する研究で博士（工学）の学位を授与された。その後、東京理科大学助手を経て、建設省建築研究所第五研究部防火材料研究室において研究員、主任研究員として、建築基準法防火関係規定の性能規定化に関わる研究等を中心に従事し、2003年から東京理科大学工学部建築学科において材料防災系の分野を担当し教鞭をとっている。

同君は建物火災を想定した加熱時の防火構造、耐火構造等の被覆を施した建築部材の温度性状や熱劣化性状、及び建築物の内外装の延焼性状等に着眼した系統的な研究を行い、それら性状の物理的現象を定量的に明らかにし、火災安全性能評価に寄与する知見の収集を実施している。建設省建築研究所勤務時には、2000年に建築基準法防火関係規定の性能規定化で導入された性能検証法の策定に携わり、防耐火構造に関わる被覆を施した建築部材等の検証式の導出等に従事した。また、知見が極めて乏しい地震後に損傷を受けた建築部材の被覆の防耐火性に着眼した研究も行い、加熱時の損傷を受けた建築部材の温度性状に関する実験や数値解析を精力的に進め、定量的な予測モデルの提案等を行った。

さらに、有機系材料を用いた建築内外装の加熱時の燃え広がり等の延焼性状に着目した研究を進め、東京理科大学に奉職して以降、東京理科大学が日本で唯一保有するISO 13785-2 大規模ファサード試験装置を使用した研究を行い、外装の火災安全性能を評価するための加熱強度のモデル化や外装の延焼性状等の有益な知見を収集し、ISO会議等に資料を提供するなどしている。また、有機系材料の内装の延焼抑制手法にも着眼し、薬剤を使用し難燃化した木質系材料の防耐火性や散水設備を使用した延焼抑制効果等を明らかにし、建築基準法の内装制限等に関する改正に寄与する成果をあげている。

同君は近年、国土交通省総合技術開発プロジェクト「防火・避難規定等の合理化による既存建物活用に資する技術開発（2016～2020）」及び（国研）建築研究所研究プロジェクト「木質等の内装を有する建築物の避難安全設計技術の開発（2016～2018）」のWG主査、委員等として、建築物の内外装の火災安全性能評価の合理化に向けた委員会活動も行っている。

これまでの研究成果は、日本建築仕上学会、（一社）日本建築学会、（公社）日本火災学会等を中心に発表しており、同君の実施してきた一連の研究は、防耐火構造に関わる被覆を施した建築部材の防耐火性や内外装の延焼防止性等の合理的な火災安全性能評価を行う上で有益な知見を多く与えている。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の論文賞を贈るものである。

論文賞

増田 隆行君

伝統木造に使用する塗装材・屋根材に関する一連の研究

増田隆行君は、1991年（株）間組（現（株）安藤・間）に入社し、主に建築仕上げ・コンクリート及び伝統建築に関する施工技術支援業務・技術開発業務を担当しており、日本建築仕上学会においては、2000年～2001年に学術委員会、2003年以降は大会実行員会の委員として活躍し、2013年から現在に至るまで大会実行委員長を務めている。

同君は伝統木造工法を用いた歴史的建築物の復元・修復工事に携わる中で、自然素材を用いた木材保護塗装材と伝統的屋根葺き工法のこけら葺き屋根に着目し、これらの耐候性評価や耐久性向上に関する研究を行ってきた。

復元・修復工事では伝統的な材料を使うことが尊重される中で、漆の代用となる膠(にかわ)や柿渋、植物油などを原料とした外装木材の保護塗装材について、促進劣化試験と屋外暴露試験から耐候性に関する有益な知見を得た。いずれの塗装材も木材保護効果を有しているものの、伝統的な塗装材は木材用塗料に比べて効果が低く、早期に塗替えが必要になることが分かった。また、塗装材下地の木材素地加工の種類については工事コストに大きく影響するため合理的な選定が求められているが、檜かんなや台かんなによる仕上げの種類、さらに木材が芯材・辺材のいずれの基材であっても、塗装材は同等の耐候性を確保できることを明らかにした。

一方、樺や杉などを手割りしたこけら板を葺き上げるこけら葺き屋根について、従来から 20～25 年程度の一定間隔で全面葺き替えすることで、その形状と性能を維持しているが、これまでに様々な耐久性向上の取り組みも試されてきた。しかし、その効果は専門技能者の経験・実績に頼ったものであり、実験から検証した事例は少なかった。そこで、こけら葺き屋根の耐久性を評価するために屋外暴露試験を行った。谷部など雨水の流下が多い条件では劣化が早いことを確認した。耐久性向上対策の中で、こけら板の間に銅板を挟み込んだ葺き込み銅板の手法に着目して、銅板の葺き足部分から銅成分がこけら板の表面に溶出し、溶出量は葺き足の長さに相関があることを示して、流下した銅成分がこけら葺き屋根の耐久性向上に有効であることを明らかにした。また、建物内部への漏水リスク低減を期待して、こけら葺きと野地板の間に敷設されることがある改質アスファルトルーフィングについて、こけら板の通気を阻害し、早期にこけら葺き屋根を腐朽劣化させることを実験より明らかにした。

同君の一連の研究は、歴史的建築物の復元・修復工事において、材料選定の判断指標として活用され、建設業界及び社会への貢献は極めて大きい。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の論文賞を贈るものである。

作品賞・建築部門

中藤 泰昭君・高岩 遊君・今村 水紀君
La・La・Grande GINZA

みゆき通りに面して、歴史ある泰明小学校が建っているが、La・La・Grande GINZA は、その向かい側の 4m 道路を斜めに入ったところに位置する商業テナントビルである。この 4m 道路への接道により 18m の高さ制限があるため貸し付け面積を最大にし、通りとの接し方に真剣に取り組んだ結果、設計者が縁側と呼ぶ幅約 2m の空間を道路に面してつくることで、この建物の表の顔とも言えるファサードが生まれた。

この空間を際立たせるための様々な工夫を見ることができる。縁側の一部は避難用のバルコニーであり、ガラスの手摺り越しに外部に開いている。一部は各テナントのエントランス部分でありガラスで前面道路と仕切られている。また一部は階段とエレベーターのホールの役目を果たしている。エレベーターを降りた正面は外部ながら前面道路と天井面までのガラス面によって仕切られ、残りはガラスの手摺りのバルコニーである。外と内とを曖昧につなぐまさに日本古来の縁側である。

そしてこの建物の顔でもあるこの縁側を軽やかに颯爽と見せるために、張り出したこの部分のスラブの配筋に工夫を加え、さらに上から吊ることによって可能な限り薄く軽やかにしている。前面道路からの延焼の規定をかわすためにスチールサッシを用いているが万一に備えサッシ内にステンレスの樋を備えるなど防錆の工夫をしている。この真っ黒なスチールサッシの堅枠の前面にスラブを吊る銀色のタイロットが来るのだが見るものには銀色の縦線が強調されサッシを隠し、ファサードの軽快さを増長させている。

18m の高さ制限で限られた階高の中でできる限りの天井高を得るために室内部分は 450mm 厚のボ

イドスラブとし、スパン 11m、天井高 2.755m の内部空間を確保している。

もう一つ大切なことは、この建物が商業テナントビルだと言うことである。しかも、道路に向かって大きなガラス面やガラスの手摺りのバルコニーがある。各階のテナントが、それを使って各社のアピールをしたくなることを考えておかなければならない。勝手に各社が気ままに主張されると折角の入居者全ての財産でもあるシンプルなファサードの美しさを活かせなくなる。このことをしっかり押さえて取り決めを行って地上階に全テナント名の入った照明を置いて案内としている。建物の立地と用途を十分考慮した上で、各部のディテールを見事に昇華させシンプルで崇高ともいえるファサードを持つ建築を都心の路地に実現しているのは見事である。

よってここに、日本建築仕上学会賞の作品賞(建築部門)を贈るものである。

作品賞・住宅部門

鈴木 亜生君
SHIRASU/桜島

本作品は、桜島を一望できる高台の住宅地に位置している。本来であれば現地に赴いて、立地する鹿児島県の風土とともに確認するところであるが、本年はコロナ禍でリモートによる設計者へのヒアリングと資料提供による審査となった。

建築主はアメリカ人で、世界遺産でもあるネイティブアメリカン集落「タオス・プエブロ」に憧れ、土を使ったサステイナブルな住宅を依頼された。多雨多湿の鹿児島県ではアドビ煉瓦の使用は難しいが、地域性を確保しながら以下のような工夫がなされている。

具体的には、鹿児島県の地下資源「シラス」とセメントをシラスブロックとした組積造を構造体としている。このシラスブロックは地域のメーカー（株）ストーンワークスによる新しいゼロスランプ加圧成形法を用い、加水せずシラスとセメントを高圧縮することで密着硬化させ強度を確保している。また、今回計画では過半をシラス、内装側表層に鹿児島県の赤土を2層として構成し、仕上を兼ねるブロックとして開発している。更に、外装は奄美土配合の左官仕上とし建築主のイメージに答えている。

空間構成は4つの口の字の組積造をエントランス、キッチン、ベッドルーム等の部屋ごとに小さな棟に分け2階建とし、それを繋ぐ様々な余白のスペースとして、吹抜で桜島を臨むリビングダイニングやポーチ、階段、バルコニー等が構成されている。

今回のリモートヒアリングでは現地で直接確認することが出来なかったため、比較的最近の建築主の住まう状況を写真にて提供頂いた。昨年写真では家具が入り、桜島を臨むリビングダイニングで、建築主の方々が快適に集う姿が映し出されていた。また、最近の外壁の状況も映し出され、経年的な経過観察も確認できた。筆者も建築の特殊性から現地で空間を体感することを重んじたと考えているが、コロナ禍の状況で熱心に設計者から説明頂くことができた。

本作品は、①長期的な視点に立ち骨材資源が枯渇する国内状況で、代替資源としてシラスをブロック化した構造材を実用化することで、新たに生まれる環境建築の提案がなされ、「地域性からの構造」という新しい構造のあり方を創出している。また、②採用されているシラスブロックの製造過程がゼロスランプ加圧成形法という高圧縮によるものであり、焼成せずに圧縮成形なため、より環境配慮型の製品の利用促進が提言されている。タイルや瓦等の焼成型建材についても今後、守りゆく資源であるが、枯渇の問題はより一層深刻化した問題であり、そういった意味でも評価される。

よってここに、日本建築仕上学会賞の作品賞(住宅部門)を贈るものである。

作品賞・住宅部門

末光 弘和君・末光 陽子君・田中 建蔵君
淡路島の住宅

本建物は、淡路島の海に面した高台の住宅で、眺望にも恵まれた立地だという。例年は現地審査に飛び、地元の風光や名産にも触れることができたのであるが、本年度はコロナ禍で NG。変わって設計者へのリモートでのヒアリングとなった。施主はドイツ人と日本人の夫妻で海(サーフィン)好き、そして素材について環境コンシャスが高く ZEH(ゼロエネルギーハウス)が求められた。

外観は、東側の海に面した広い敷地(1244.79 m²)に南北に長い切妻型を頂いた矩形のボリュームが籠状に浮いている。そこに午前の日射のコントロールと室温より 4 度ほど低い海風を生かし快適な半屋外環境が計画された。そこで日本三大瓦の一つである淡路瓦がダブルスキンの外皮に使われた。その形状は瓦職人との協働で太陽の軌跡を元に製作された。湾曲した帯状の 50 cm ほどの瓦(t=18 mm)は両端に折り返しを持ち、そこでスチールの横棧(□-40x20x1.6mm)に上下 2 点で深くビス止めされている。比熱の大きな瓦は真夏の木陰のように涼感をうむものとなっている。実際、設計者はこの半屋外環境を環境シミュレーションにて用いた独自の評価軸でその温熱効果を確認している。また 1 階の外壁も淡路の土壁を用い土地の風土に馴染むものとされている。

この建物全体の高い断熱性能にさらに高性能木サッシが用いられている。加えて地下 50m の地中熱を利用して冷暖房エネルギーを賄い、海側のプールの温度上昇で給湯エネルギーを賄うなどでゼロエネルギーを実現している。

設計者は、現在主流の高気密高断熱と機械制御による空間を「閉鎖系モデル」と、南日本や東南アジアの通風や日射遮蔽を利用する環境建築を「開放系モデル」と名付け、「ふたつの」空間モデルの違いは、「地域の気候によるもの」とし、閉鎖系モデル一辺倒の設計に警鐘を唱えている(新建築 2018 年 4 月号「環境建築に開放系モデルの可能性はあるか」末光弘和)。

戦後、重装備に傾き、さらに災害が加速する近年、クローズドになりすぎ、地域と断絶した住宅のあり方に疑問を募らせてきたのは筆者のみに限らない。

そして、コロナ禍。三密を避け「集から疎へ」人々の意識も大きく変わり、ニューノーマルが求められ住まい方やライフスタイルも大転換が予測される。この住宅のあり方は「半屋外環境」= 中間領域が快適なアフターコロナの暮らしのキーになることを先取りしているとも言え、素材への挑戦を通し地球環境へ配慮した住まいの実現を見事になしている。

よってここに、日本建築仕上学会賞の作品賞(住宅部門)を贈るものである。

技術賞

高栄 正樹君

建築用仕上塗材の普及活動と業界への貢献

高栄正樹君は、1982 年 4 月日本ペイント(株)に入社後、主として建築用仕上塗材の製品開発・改良に注力し、特に高耐久性、意匠性、高日射反射性、低汚染性、抗菌性、帯電防止性などの機能性を有する材料について、その機能向上の研究に尽力した。また、発注者、設計者、受注者などに対して、建築用仕上塗材をはじめとする湿式仕上材料の普及・広報活動を行うとともに、専門工事業者への施工指導を行い、業界の発展に大きく貢献した。

同君の業界における主な活動及び業績は、以下のとおりである。

1. 日本建築仕上材工業会における活動と業績

(1)2008 年に、工業会が自主的に実施している「ホルムアルデヒド放散等級自主表示制度」の審査委員に就任し、2015 年からは委員長として制度の運営に努め、SDGs の一環として建築用仕上

塗材の環境対策を推進し、制度の普及と化学物質の放散低減に貢献した。

(2)2015年に、防火材料の品質管理を目的とした委員会の委員に就任し、国土交通大臣認定を受けた仕様に該当する建築用仕上塗材の品質確保に努め、建築物の安全性の確保と業界の発展に貢献した。

(3)2010年に、工業会の技術的課題を検討する委員会の委員に就任し、建築用仕上塗材に関するJIS改正、建築工事標準仕様書等の改定など材料・施工の標準化に努めた。また、各種マニュアル、ハンドブック、ガイドブックなどの技術資料の作成に努め、業界への情報提供と湿式仕上材料の普及に貢献した。

(4)日本建築仕上学会への委託研究や学会の活動に関連する課題においては、工業会を代表して参画している委員を補佐し、研究課題の早期解決と成果の普及に貢献した。

2. その他の業界団体における活動

(1)(一社)日本建築学会「建築工事標準仕様書 JASS18 塗装工事」の第7次改定に当たって、WG委員に就任し、セメント系素地及びせっこうボード素地面塗装の改定作業に貢献した。

(2)(一社)日本塗料工業会の技術委員会委員、同建築部会長、防火審査委員会委員長、ホルムアルデヒド自主管理審査委員会委員などを歴任し、建築用塗料に関する技術研究、広報・普及、標準化、環境対策、セミナー開催と講演などの活動を通じて、塗料業界の発展に貢献している。

(3)東京都塗装工業協同組合の教務委員会副委員長に就任し、委員会活動を通じた業界の認知度向上と教育システムの構築に尽力している。また、同協会の運営する東京都塗装技術専門校の建築用塗料講師として学校運営に参加するとともに教育活動に従事し、若年層の塗装技術者育成に貢献している。

以上のように、同君は主として建築用仕上塗材に関する一連の技術活動、広報活動を通して、業界の発展に多大な貢献をした。

よってここに、日本建築仕上学会賞の技術賞を贈るものである。

技術賞

島村 浩行君

メンブレン防水技術の調査研究、普及啓蒙並びに防水業界の技術向上に対する貢献

島村浩行君は、1986年に明治大学工学部工業化学科を卒業。同年田島ルーフィング（株）に入社し、一貫してウレタン塗膜防水材、アスファルト防水材や合成高分子系シート防水材等の主要な建築防水材料の研究開発に携わると共に、防水材料および工法の材料開発、技術開発とその普及活動を行ってきた。

同君は2003年から日本ウレタン建材工業会の技術委員として、また、2015年からはアスファルトルーフィング工業会（現（一社）日本防水材料協会アスファルト防水部会）の技術委員として活躍してきた。その間、2006年から2020年に渡り、防水工法の耐久性に関する研究成果、ウレタン塗膜防水材、同防水工法の耐疲労性や耐風性に関する研究成果やアスファルト防水材料品質の標準化など、幅広い活動成果を共同研究者としての参画も含めて、日本建築学会大会で20編以上発表してきた。

また、同君は2015年から日本防水材料連合会（現（一社）日本防水材料協会。以下、JWMAと略す）の技術委員として参画し、2018年から同技術委員長とJWMAアスファルト防水部会技術委員会主査を兼任するなど建築防水材料業界に共通する課題に対しても積極的に関与してきた。この間、2018年から日本建築学会材料施工委員会防水工事運営委員会の委員として参画し、また、令和元年版の公共建築工事監理指針防水分科会および公共建築改修工事監理指針防水改修分科会に委員として参画して、一貫して建築防水技術の普及啓蒙に貢献してきた。

同君は近年、注目が高まっている防水工事の重要な課題である防水層の耐久性（耐候性）に対しても、（一社）日本建築学会での長期ばく露の検討に当初より関与しており、数々の幅広い研

究成果を同会大会で発表してきた。その活動の一環として、最近では 2015 年から開始された国土技術政策総合研究所の「地域安心居住機能の戦略的ストックマネジメント技術の開発・改修防水層の耐久性検討委員会」に委員として参画している。

また、同君は建築物の省エネルギーに貢献する防水工事用断熱材の材料開発やその普及啓蒙においても主導的な役割を果たすと共に、JWMA 会員各社の若手技術者の育成に関して、2006 年から毎年継続して開催している JWMA 海外文献勉強会や若手技術者勉強会においても主導的な立場で指揮し、数多くの若手技術者への育成に大きく寄与してきた。また、2015 年からは著しく劣化したコンクリート構造物の防水層の調査の一環として行った長崎県・端島（通称、軍艦島）の防水層調査や防水改修方法の検討を行ってきた。

以上のように、同君は一貫してメンブレン防水材料および防水工法の技術開発、調査・研究と普及啓蒙並びに防水技術の向上に対して大きく貢献している。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技術賞を贈るものである。

技術賞

近藤 旭君

建築用金属材料の工場塗装における品質確保と環境配慮の実践及び工業会への多大なる貢献

近藤旭君は、明治大学を卒業した直後に米国へ渡り、ノースカロライナ大学シャーロット校を卒業した半年後には米国公認会計士（U. S. CPA）の資格を取得して、日米の監査法人に勤務した。その後 2009 年に帰国して塗料製造大手企業で建築塗料部門に所属した後、2011 年に埼玉県草加市で装飾金物の塗装業として 1966 年に創業した（株）マルシンに転じた。建築用金属材料に対する工場塗装を中心とした事業展開をしている同社において、2014 年 6 月に代表取締役社長に就任し、経営者として 2014 年に QUALICOAT ライセンスを取得し、さらに 2016 年に ISO 9001 と ISO 14001:2015 の認証更新を推進した。QUALICOAT は 1986 年に欧州で設立された粉体塗装を中心とした規格認証システムで、アルミニウム合金に対する優良塗装品質の基準を展開するため、世界約 50 カ国で主として品質ラベル表示許可の認定及び監視をしている。日本国内で初めて認証許可を得たのは（株）マルシンであり、経営者自らが品質管理及び環境管理を積極的に進めている企業である。

アルミニウム合金材料に対する塗装品質の確保と向上及びその普及展開、さらにはそれらの活動を通じた社会貢献や環境保全を目的とするアルミニウム合金材料工場塗装工業会（ABA）の 2014 年 1 月創設に際しては、（株）マルシンが中心的な役割を果たした。同君は ABA 創立時に理事、2016 年には専務理事に就任して、工業会の企画・運営を推進している。特に、米国フロリダ・アリゾナ屋外暴露試験場および韓国やベトナムの塗装工場視察においては、卓越した語学力と国際感覚を生かしてコーディネーターを務めて、帰国後の報告書作成や学会での公表においても中心的な役割を果たし、韓国建築施工学会との MOU 締結の大役も務めた。また、ABA が日本国内で毎年複数回開催している勉強会においても、企画・運営を推進している。さらに、2019 年から「工場塗装管理技術者」資格認定制度委員会の幹事として、資格制度の創設と講習会テキストの作成を主導して、2021 年 2 月に第 1 回資格認定試験の開催を実現した。

また、2018 年からは日本建築仕上学会環境配慮形塗装普及展開委員会の委員に就任し、積極的な活動をしている。その他、2015 年 5 月から（一社）日本パウダーコーティング協同組合監事、2017 年 2 月から QUALICOAT JAPAN の執行委員会委員を務め 2019 年には本部と技術的な規格や問題点を調整する TC（技術委員会）の日本担当委員に就任するなど、当該分野において類まれな貢献をしている。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技術賞を贈るものである。

技術開発賞

栗秋 裕次君・横井 弘喜君

タイル張り仕上げに関する技術開発ならびに関連指針類作成に対する貢献

栗秋裕次君は、平成元年に I N A X（現 L I X I L）へ入社し、大形タイルの技術営業を行った後、大形タイル弾性接着剤張り、乾式工法の開発、外壁タイルによる複合改修構工法の開発、浮き注入補修改修工法の研究、タイル張り外断熱工法の開発および土系素材の施工技術等、タイル張りを中心とした幅広い領域で研究開発を行ってきた。2013 年からは、（一社）全国タイル業協会で施工技術研究委員会・委員長、全国タイル工業組合 Q-CAT 委員会・主査となり、タイル業界の活動等を兼務しながら日本建築仕上学会をはじめとした公的な活動にも参画している。本会の活動としては、2014 年の外壁タイル自動剥離診断機の信頼性評価委員会・委員や 2015 年のセメントモルタル塗り用吸水調整材・規格改定ワーキング・委員などがある。

横井弘喜君は、全国タイル業協会に入社して以降、セラミックタイルに関する JIS 改正作業に従事しており、2010 年には有機系接着剤張り用のタイル裏あし規格の追補作成、2014 年には規格名称を陶磁器質タイルからセラミックタイルに変更したほか、用途による区分やモザイクタイル規格の廃止、2020 年には実情に即した試験方法の改正などの改正作業に関わってきた。また、ISO 13006（CeramicTile）、ISO 10545-1~16 や関連規格などの検討のために毎年国際会議に参加し、外壁へのモルタル張り用裏あし規格の追加や JIS A 5557（外装タイル張り用有機系接着剤）の国際規格化を提案したなかで、そのとりまとめを行った結果、裏あし規格は ISO 13006 に追加され、有機系接着剤は新規格となる ISO 14448 として発行された。

これらのように、日本国内の建築分野、特にタイル張り工事およびその改修工事における工事標準化に関して、両君が果たした役割は極めて大きい。また、本会が発刊する「ALCパネル現場タイル張り工法指針・同解説 第4版」、「ALCパネル現場タイル接着剤張り工法指針・同解説 第2版」の改定にあたっては、原案作成ワーキンググループおよび接着剤ワーキンググループ等において、各委員の意見を吸い上げ工法指針の作成に多大な貢献を果たした。改正内容のなかでも、ALCパネル現場タイル接着剤張り工法において、タイル最大形状が 300 角に改定されたことはタイル・ALC業界にとって技術の大きな進歩発展といえる。さらに、両君が担当した施工方法の詳細な記述、タイル張り総質量の制約条件や壁面の防水性についての言及・解説によって、高品質なタイル建築仕上を目指した工法指針となった。以上のことから、両君の今後のさらなる活躍を期待するものである。

よってここに、日本建築仕上学会賞の技術開発賞を贈るものである。

技術開発賞

松村 康弘君

1成分形ウレタン樹脂とアンカーピンを組合せた外壁複合改修工法の性能評価と仕様確立に対する貢献

松村康弘君は、1997 年に大学を卒業して、建築及び土木分野における防水・外装材・競技場舗装材・舗道材・シーリング材・塗り床材などの技術開発、製造及び販売の事業をする㈱ダイフレックスに入職した。入社後は、（1）防水改修工事計画の策定における各種支援（現地調査・提案書作成など）、（2）新築工事における各種支援（設計段階の仕様提案・期中 VE 提案など）、（3）総合建設業の設計・技術・生産・品質管理部門との協業・各種支援（課題解決・品質確保など）、（4）自社製品の業界周知・標準化（各種イベント企画・セミナー講師・建設技術審査証明の資料作成など）を担当して、現在に至っている。

同君の所属企業である㈱ダイフレックスの製品である 1 成分形ウレタン樹脂に、アンカーピンを組合せて複合改修層を構築して、外壁の剥落を防止する工法を専門工事業団体である（一社）

機能性外壁改修工業会が開発した。当該工法は、30年ほど前から複数開発されて多数の実績を有する外壁複合改修構法（通称：ピンネット工法）の課題である工程数が多く複数の工種にわたる技能工を必要とすることに対して、解決を図るものである。当該工法の開発者である（一社）機能性外壁改修工業会は、その性能評価を日本建築仕上学会へ委託したため、学会内学術委員会の下に研究委員会が設置された。同君はその委託者側委員として、研究委員会における議事録の作成を担当して課題の整理に努めたうえで、材料製造者としての保有データを提供するとともに、受託側委員から要求される追加実験に対して、所属企業の技術スタッフの協力を引出して所要のデータを着実に収集した。さらに、日本建築仕上学会による報告書の作成に対しても多大な協力をして、COVID-19 感染に対する不安が高まる中で所定の期間内に所期の研究目的を達成することに尽力した。その主要な研究成果は、複合改修層の保有耐力、促進耐候性、風圧力に対する抵抗性、地震力に対する抵抗性、面外振動に対する抵抗性、防水性（耐疲労性・透水抵抗）などの材料的な内容のみならず、在来工法に対する施工優位性までが含まれている。以上のような研究成果から、当該工法は開発目標とした課題を全て満足しており、在来のポリマーセメント系外壁複合改修工法と同等、もしくはそれ以上の優れた性能を保有していることが明らかにされている。日本国内の建築保全において重要な位置付けにある外壁剥落防止に対する有効な新工法が確立され、今後大きく展開されることが期待されている。したがって、同君の活動に対して、その貢献を高く評価するものである。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技術開発賞を贈るものである。

技術開発賞

北川 将司君

建築用アルミニウム材料に対する粉体塗装の実験的評価および塗装仕様の標準化に対する貢献

北川将司君は、大学を卒業して大手塗料製造企業へ2008年4月に入職し、当初は技術開発部門開発グループに配属された。入社1年後の2009年4月からは、塗料事業部門金属焼付塗料事業部に転じて現在に至るまで、主として粉体塗料の研究開発と配合設計、さらにはユーザー塗装ラインに対するフォロー業務に携わっている。粉体塗料は環境や人体に有害な有機溶剤を含まない塗料であることから、カーテンウォールをはじめとする建築内外装用金属材料、特にアルミニウム合金材料に対する表面仕上げには不可欠な存在として、昨今大きな注目を集めている材料である。

2014年度からは、粉体塗装の実験的な評価と塗装仕様の標準化を検討する日本建築仕上学会の環境配慮形塗装標準化検討委員会、2015～2017年度の環境配慮形塗装仕様検討委員会および2018年度から現在に至る環境配慮形塗装普及展開委員会に参加しており、議事録の作成を継続的に担当している。また、上記委員会においては、これまでほとんど系統立った研究成果が見られなかった粉体塗料に対する実験的な評価を推進している。同君はそのような実験的な性能評価の中心的な役割を果たし、ほぼ毎年のように日本建築学会と日本建築仕上学会の年次大会において研究成果を口頭発表している。さらに、粉体塗料に関する自身の自主研究についても、有意義な研究成果を口頭報告している。

2018年9月発行「建築用アルミニウム合金材料 粉体塗装仕様標準指針・同解説」の検討・作成では、これまで建築分野においてほとんど採用実績が無かった粉体塗装に関して、同君が長年培ってきた豊富な業務経験と実験結果が活用され、仕様の標準化および標準指針の作成に多大な貢献を果たした。また、上記指針の発行前2016年に開催された日本建築仕上学会第12回建築仕上フォーラム「アルミニウム合金材料に対する環境配慮形塗装仕様の現状と標準化」および2018年に開催された上記標準指針講習会においては、標準塗装仕様と粉体塗料の品質規格に関する講師も担当している。

上記のように、同君は日本国内の建築分野において、今後大きく展開されることが期待されている粉体塗料を用いる工場塗装仕上げの発展に大きく寄与している。したがって、同君の活動に対してその貢献を高く評価するものである。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技術開発賞を贈るものである。

技能賞

薄井 勝君

ALC パネル工事における施工技術の向上及び後進技能者の指導・育成に対する貢献

薄井勝君は、1969年よりALCの販売に従事し、以来51年以上の長きにわたり、ALCを主体とした外装材の販売・施工に精励し、1975年に現在の薄井工業（株）を設立した。

豊富な経験と高い技術力で、栃木を中心として、茨城、群馬、埼玉の北関東に多数の顧客を持つALC販売施工店に成長させた。

同君の信条である「工期厳守」、「すべては安全から」を具現化するため、自ら率先して施工現場に携わり、安全かつ高品質なALCパネル工事を提供してきた。顧客からの高い評価・信頼を得たことで、多くの建設会社から多数の安全表彰を授与されている。

同君は地元設計事務所へのアドバイスも積極的に展開しており、絶大な信頼を得ている。

ALC外壁パネルの取付けにモルタルを用いた湿式の「挿入筋構法」の時代にALCの拡販を推進し、その後乾式の「ロッキング構法」への移行期においては、新構法であるロッキング構法の普及に尽力した。

同君の積極的な施工に対する取り組みは現場での評判も高く、大手・地元建設会社からのリピーターも多い。豊富な現場経験と技術力は「ドラッグストア」、「家電量販店」、「大手電気機器メーカー工場」、「精密測定機器工場」、その他、病院、学校、幼稚園、老人保健施設、倉庫、遊戯施設など建物用途、規模共に多岐にわたって発揮された。

現在は後進の指導・育成に対して非常に熱心に取り組んでおり、若手社員や施工会社などへ自らの知識と経験を伝承することに力を注いでいる。

以上のように、同君は永年ALCパネルの現場施工技術の向上と発展に尽力しており、この業績はALC業界ならびにALC施工技能の発展に大きく寄与するものである。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

東 平和君

瓦の持つ耐久性に応じた地震・台風に対する施工技能と技術に対する貢献

東平和君は、1966年4月に父の経営する東セメント瓦工業所に入社した。熊本県は、セメント瓦発祥の地であったこともあり、セメント瓦を製造・販売・施工を営む会社が多数存在していたが、1991年の台風19号により多くの家屋に被害が発生した際、セメント瓦と比較し粘土瓦の飛散が少なかったため、セメント瓦より粘土瓦への需要が多くなった。以来、同君は粘土瓦の施工技術を取得するために講習会等に足を運び技術の向上を図ってきた。

台風に対しては、全数緊結および熨斗瓦の結束など施工技術の改良・改善により、被害への対応が可能となり自信を持って瓦屋根を勧めることができるようになった。

地震対策については、コストの面から対応に及んでいなかったがその後起きた阪神淡路大震災により対応の必要性を強く感じる事となった。

また、熊本県では良質の粘土が無いことや冬場の凍結もあり、粘土を用いた施工における強度確保の問題や、面戸の剥離等がある屋根の事例が確認されていたため、粘土での施工を行わず、

モルタルでの施工に改善した。

葺甲屋根で降り棟の崩落事例があったことから、同君が鉄筋を用いて降り棟の崩落を防ぐ工夫を行った西原村での施工は、2016年の熊本地震においても降り棟の崩落がなく、同君が施工した家屋の好例としてさらに自信を高める結果となった。それ以降、地震の横揺れのみならず縦揺れにも対応出来るよう、全ての瓦を棟・隅等を問わず躯体に必ず固定すると同時に鉄筋を用いて熨斗瓦等も緊結する施工を行っているが、現在も施工改善に取り組んでいる。加えて、葺き替え工事の物件においては、施工の耐震診断で瓦の施工が可能かどうかを見極めたうえで葺き替えを行っている。

以上のように、地震・台風に対する瓦屋根施工に対する同君の貢献は大きい。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

大久保 隆康君

ALC パネル工事における若手育成並びに建設産業への貢献

大久保隆康君は、1975年に小野建(株)へ入社し、ALC パネル事業に従事した。同社は鐵の街、福岡県北九州市にて鋼材販売の鉄鋼部を主力として、ALC パネルを始めとする建築資材・建築機械の販売に基軸を置く建機部を持っている。

同君は建機部の黎明期をALC パネルと共に歩んできた。同社は大型化・省力化していく建築物において、鉄骨建築物が増加する事をいち早く察知し、仕上げ工事としてのALC パネル工事の需要が増加すると見込みALC 事業に参入した。参入当初、同社内では工事を伴う請負形態にリスクを懸念する声もあったが「存在感のある企業を目指す」経営方針を元に、大きな意義を感じながら業務を推し進め現在に至る。

同君は高度成長期からバブル期への転換の時代に同社のALC パネル事業を伸長させ、福岡県を中心とした九州一円から沖縄県まで販売エリアを拡大した。

2000年代に入ると技能者の高齢化・若手従事者の不足が一気に顕在化し、安定的な施工提供に苦慮することとなった。そこで同君は施工体制の強化を図るため、同社の100%子会社である工事会社を設立し、外国人労働者の受け入れをはじめさまざまな手段を講じ、施工の安全と品質管理の徹底に乗り出した。この事が功を奏し、同時期に発生した世界的な金融リスクから派生するALC パネル工事の過当競争にも柔軟に対応でき、難局面を乗り越えるだけでなく、九州・沖縄地区におけるパネル事業の拡充を果たしている。

また、同君は開発営業部を社内に常設してALC パネル工事の積極展開を図り、ALC パネルの折込活動にも余念がなく、今も尚、九州・沖縄地区でALC パネルの拡販に尽力している。

以上のように、同君の長年にわたる活動は、ALC 業界の発展に多大な貢献をしている。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

前田 光弘君

壁装仕上工事における技能の向上及び継承の推進に関する貢献

前田光弘君は、28歳の時に他業種から妻の実家が経営する中村表装(株)に入社し、一から壁装仕上工事を学んだ。その時から40年壁装仕上工事に、現在では同社の代表を務めると共に、(一社)日本壁装協会の団体会員である(一社)壁装研究会の会長として壁装業界の発展のため

邁進し続けている。

同君の信念は、壁装業界の発展のために「壁紙の品質と意匠性の向上」と「施工技術の進歩」を追い求めることであり、防火認定をクリアしながら最高の品質と意匠性を持つ壁紙が日本で産み出されるよう業界内で声を上げ続けている。

また、その商材を最高の状態で施工し顧客に満足してもらうために、40年間の長きにわたり譲れない信念を持ち施工技術者の育成に取り組み続けている。その信念とは、新卒者を社員として職人枠採用し、社会人としてそして技術者として、ふさわしい心と技と体力を持った人材を継続して育てることである。

現在、同君が代表を務める会社の元で60名が「いい仕事をして、お客様に喜んでいただく」という理念の下、一丸となって内装施工に取り組んでいる。

しかし、同君の目標は自社に対してのみではなく、日本全国の壁装技術がより向上し、全国の方々へ壁装の素晴らしさを届け、顧客の満足を得ながらこの業界が発展し続けていくことである。その目標達成の一環として、（一社）日本壁装協会と共に全国で織物壁紙など各種商材とその施工方法を伝えるべく施工講習会を実施している。

以上のように、同君の壁装技術者の育成、技術の伝承、および業界一丸となつての商材開発の取り組みやその普及活動は壁装業界の発展に大きく貢献している。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

上銘 安男君

富山県における技能検定の推進と後進の育成に対する貢献

上銘安男君は、1975年3月に富山県立井波高等学校を卒業後、近畿大学工学部に入学した。学生時代の長期休暇時には必ず帰省し、（株）日本ビルサービスでアルバイトに精を出した。器用さと誠実さを評価され、学生ながら現場を任せられるほどにまでになり、色々な現場に対面できること、建築物が綺麗になることに魅力を感じ、大学卒業と同時に同社に入社した。

同社は防水工事とビルメンテナンスを主として創業、現在では建物劣化調査や外壁改修、耐震補強などを行い、「建物の主治医」として地域に密着した工事を行っている。同君は入社後、主に現場を担当し、各種改修工法や新材料、毎回異なる劣化状況への対応などを学んだ。そして会社の発展に大きく貢献し、2006年には代表取締役社長に就任した。

同君が近年手掛けてきた物件で代表的なものとしては、公共工事では南砺市立井波中学校改修工事、同福光中部小学校改修工事、七尾宿舎外壁改修工事、民間では某通信会社ビル外壁改修工事のほか、マンション大規模修繕、住宅リニューアルなどが挙げられる。長年培った経験で樹脂注入工事をはじめ維持・保全のための改修提案・施工を行い、役所・受注者などから多くの表彰状・感謝状が贈られている。

同君は優れた知識と経験を基に、業界の発展や人材育成に尽力してきた。1986年に初めて開催された技能検定「樹脂接着剤注入施工」を受検・合格してから現在まで、富山県の検定実施に深く関与しており、2007年からは検定委員に就任している。

日本樹脂施工協同組合北陸支部では、外壁タイル剥落防止工法など組合オリジナル工法の普及

や樹脂注入工事などの改修工法の推進、技術指導などに努めた。また青年部の創設にも尽力し、精力的に若手の育成に当たっている。以上のように、同君が業界に尽くした貢献は極めて大きいものである。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

稲津 一也君

建築・土木構造物の改修技術の研鑽と技能検定への貢献

稲津一也君は、建築・土木構造物の改修工事に関して優れた知見を有しており、樹脂注入、止水、耐震、防水工事の他、タイル剥落防止工法をはじめとした改修市場における工法の開発・普及に積極的に取り組んできた。また改修・補修に関わる技能検定職種の実施に長く関わり、後進の育成に尽力してきた。

同君は大阪市大正区に生まれ、1979年に興国高校を卒業後、現在の仕事に繋がる改修工事主体の企業に入社した。入社後は主に現場を担当し、さまざまな材料・工法に積極的に取り組んで技術の研鑽に努めた。そして1985年に独立し、「建築物のお医者さん」をキャッチフレーズに大正技建（株）を創設した。

同君はメンテナンス工事のプロとしてのプライドを持ち、建築・土木構造物の補修・補強工事に長く従事し、数多くの経験を通じて、様々な工法やその進化の変遷など豊富な知見を持っている。業界活動にも積極的に参加し、技能検定・樹脂接着剤注入施工（樹脂接着剤注入工事作業）の検定委員に長く携わり、大阪府知事感謝状を授与されている。2009年からは大阪府首席検定委員、また中央技能検定委員として現在も活躍している。

日本樹脂施工協同組合においては現在、関西支部の中心の一人として組合活動を支えている。特に技術研修会等においては、材料・工法に精通した視点で組合オリジナル工法等の周知に努めており、若手に対する技術指導や相談等、組合の技術力の底上げに尽力している。また同業者で組織するさまざまな団体においても中心メンバーとして活躍し、技術の向上・進化に対する真摯な取り組みから人望も厚い。以上のように、同氏が業界に尽くした貢献は極めて大きいものである。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

中村 好美君

塗装技能及び施工管理技術の向上と後進の育成に対する貢献

中村好美君は、1981年4月佐藤興業（株）北海道支店に入社以来、塗装技能の向上と施工管理の実務に励み、自社の工事部の中心的な存在として永年携わってきた。資格は1級建築塗装技能士、登録建設塗装基幹技能者の他、塗装技術の工法に関する資格を多数取得しており建築塗装の技能と施工管理業務の幅広い知識を有する人物である。

同君は広範囲で多数の工事实績を有しており、携わった施工現場では、いずれの工事も安全管理、工程管理及び品質管理を徹底し、周囲にその仕事内容を高く評価され顧客の要求に応じている。近年では主に現場代理人や主任技術者として卓越した技能で現場に適応した作業方法の選択、作業員の効率的配置を行い、労務にロスがないよう合理化を心がけている。技能者としては下地パテ処理から仕上げ処理など、どの工程においても技術・技能に優れており、特に吹付系やコテ塗系の仕上げでは優れた技術を持ち、受注者や現場所長からも高い評価を受けている。また安全

管理意識は高く、積極的に社外の安全講習会に参加して持ち帰り、社内の安全教育の講師として活躍している。その手法は OJT により実践的な手法で、指導育成として日々の現場では始終業時の現場点検から危険予知を励行し周囲の作業者に安全指導を行なっている。施工現場の実情に合った安全パトロールなど施工現場の安全衛生の意識の喚起を促す地道な努力を続け、職長としての職責を十二分に全うしており、社内外で安全優良賞等を受賞している。自社では後進の指導育成にも熱意をもって接し、各作業現場において、常に社内の塗装技術・技能の向上に取り組んでいる。

同君はこれまで同一企業に 30 年以上にわたって勤務し、その真面目で温厚な人柄は職場内の誰からも信頼を得ている。技術・技能の研鑽に余念がなく、他の従業員の模範となっている。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

菅野 勲君

宮城県における下地補修施工技術の普及に対する貢献

菅野勲君は、1985 年に（株）東北協和工商に入社し、その後、1994 年に独立した後、2001 年にマルカン工業（有）を設立して現在に至っている。設立当初は、防水業を主軸として外壁改修工事に携わっていたが、建築物の補修工事の増加に伴い下地補修工事や土木橋梁補修工事などに積極的に参入していった。同君は東日本大震災によって甚大な被害がもたらされた東北各地での復旧・復興業務にもこれまでの経験を活かし、尽力している。また、調査から診断までの業務も行っており、様々な現場に適応した的確な施工方法を提案している。補修や改修分野では宮城県のみならず東北各地で外壁改修工事実績があり、大規模修繕工事などにおいては発注者および受注者から厚く信頼されている。また、土木構造物補修工事にも携わっており幅広い分野で業績がある。

また、同君はコニシベシステム工業会の理事として、工業会の発展に尽力しており、工業会専用工法である外壁剥落防止工法（ピンネット工法）を宮城県内に普及させるために、設計事務所や公官庁への折込活動を行ったり、受注者様への工法説明会を開催したりするなど、外壁剥落防止工法の PR 活動に貢献している。同君の努力を惜しまない PR 活動により、タイルやモルタル剥落の危険性、施工の重要性を広め外壁剥落防止工法（ピンネット工法）の認知度を高めることとなった。

以上により、同君の努力で宮城県、ひいては東北全体に外壁改修施工技術を普及させた業績は極めて大きく、宮城県を代表する施工業者となり業界への貢献度は高く評価でき、今後の外壁改修工事の信頼性・安全性向上に寄与できるものと確信している。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

米満 泰二君

熊本県など九州地方における外壁改修技術の向上と外壁複合改修構工法の普及拡大への貢献

米満泰二君は、明治大学農学部を卒業後、JT（旧日本たばこ産業（株））へ就職し、同社にてたばこ産地の土壌検査、肥料の選定と生産物の品質検査に取り組んでいたが、1993 年に家庭の事情により現在の菅産業（株）へ入社した。業界は異なるが、土木、建築と様々な現場を経験して

真面目に社業に努め、2002年には一級土木施工管理技士、2007年には一級建築施工管理技士を取得するなど自己啓発を行い技術の研鑽に励んだ。また2002年には同社の代表取締役社長に就任し、会社運営の傍ら、地域貢献、業界活動にも力を注いだ。

同君はさらに、熊本県ビルリフォーム協同組合で2014年に専務理事、4年後の2018年には理事長へ就任し、現在、熊本県統一ピンネット委員会委員長を兼務し、県内の公共施設・公営住宅・学校等の外壁改修工事への適切な施工・安心安全に寄与している。熊本県統一ピンネット委員会では20年間検査委員として様々な外壁改修工事物件に携わり、行政立会の下、数多くの現場の適正な施工の確認指示を行い、構工法の信頼性向上と検査体制を確固たるものとする活動努力を行ってきた。2019年には熊本県ビルリフォーム協同組合が中心となり、熊本県のみならず、九州地区各県より受講者を集め全国ビルリフォーム工事業協同組合が展開する外壁複合改修構工法のライセンス講習会を開催し、数多くの管理技術者を輩出するなど後進の育成にも尽力し、当該構工法の品質確保と技術向上に努めるとともに、普及拡大にも貢献している。

2018年の熊本県ビルリフォーム協同組合理事長就任以降は、外壁落下防止技術の外壁複合改修構工法（ピンネット工法）の普及拡大の為、行政・設計事務所への営業活動、PR活動を積極的に行い、会員の協力も得て2020年には就任時の倍の売り上げ実績を残しており、熊本県の外壁改修工事における同構工法への信用信頼獲得への貢献は極めて大きいものである。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

宮木 康吉君

塗装工事における廃棄物低減と工事の効率化による貢献

宮木康吉君は、建築塗装工事において下地作り及び素地ごしらの重要性を深く認識し優良な施工管理を行っている。また、塗装作業においては工具や工法の選定に熟慮しながら技能レベルに則した技能者を適材適所に配置し、現場に則した作業手順書を作成の上、優良な施工管理を行っている。

また、複層塗材等の外壁吹付工事においては、基層吹き of 所要量を徹底管理し性能確保に努めると共に、模様吹きのパターンの均一化を計り、美観に優れた仕上げ面の確保に努めレベルの高い品質管理を行っている。鋼構造物塗装工事においては、塗膜厚管理の徹底に加え、温湿度、鋼材表面温度を元に露点を計測し表面結露状態での塗装を避ける等に努め、良質な塗膜形成に努めている。耐火塗料塗装工事においても同様に耐火層膜厚を的確に行い主要構造物の耐火性能確保に努め、あらゆる建築塗装工事において優秀な管理を行っている。塗装工事に関わる環境対策の為、水系塗料の廃水処理技術を用い、凝集剤により塗料と水を分離させる技術で廃棄物の低減を図ると共に、凝固剤を用いて塗料廃材を固め、廃棄物低減に取り組み積極的に環境対策を行っている。

また、塗装機械を有効に使い、スプレー塗装等では塗着効率の高いエアコートガンを活用し作業の効率化に加え塗料ロスの低減に努めている。また、工程管理においては、塗装作業の平準化を計り、技能者が合理的に良質な作業が出来るよう努めている。

建築塗装工事においては、中部国際空港貨物ターミナル新築工事、某展示施設新築工事、名古屋市西部医療センター新築工事、県立多治見病院改築工事、愛知県立芸術大学音楽学部新築工事等の塗装工事において施工管理を担当、豊富な実績を有している。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

天田 裕之君

外壁複合改修構工法を含む外壁改修技術の品質確保及び耐久性の検証に対する貢献

天田裕之君は、建築系の専門学校を卒業後、1993年に川崎市に所在する設計事務所である（株）創信建築事務所に入社した。同社では個人邸や集合住宅の設計に従事しながら、建築計画や建築工学を学び、1995年には2級建築士を取得した。その後も専門知識を発揮して首都圏に十数件の建築設計を行った。1997年には渡辺物産（株）（現リノ・ハピア（株））に入社し、同社の調査診断設計部に配属され、タイル面やモルタル面の目視調査や打診調査をはじめ、コンクリートの圧縮強度や中性化などの試験や鉄筋探査機を使用した配筋調査を経験し、建物の調査・診断の基礎を学んだ。その後、営業部に配属され、これまでの知識を生かして実績をあげながら、施工管理能力の向上にも努め、2005年に1級建築施工管理技士、2015年に2級土木施工管理技士を取得した。2014年に同社の取締役営業部長に就任し、現在に至っている。

同君は弛まぬ営業努力を続ける傍ら、外壁改修の技術向上にも尽力しており、全国ビルリフォーム工事業協同組合の技術委員を2005年から現在まで15年以上に亘り努めており、同組合の技術力向上に注力している。2007年には本会の大会学術講演会にて「外壁複合改修工法の耐久性に関する検討」を発表した。続いて2016年にはピンネット新工法の評価委員会にてアンカーピンの保釘力向上とポリマーセメントフィラーの耐久性向上に取り組んだ。また、2017年から2年間、国土交通省国土技術政策総合研究所が実施した改修外壁・屋根防水の耐久性検討委員会に委員として参加し、外壁複合改修構工法の認知と普及拡大に積極的に取り組んだ。さらに同組合のオリジナル工法の一層の普及・発展のため、全国各地でライセンス講習会の講師としても同行し、当該工法の管理技術者養成及び品質確保にも尽力している。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

古谷 武徳君

塗装現場における施工品質の向上と後進の育成に対する貢献

古谷武徳君は、1988年に塗装工として入職すると、以降様々な現場で経験を積み、1992年に2級鋼橋塗装技能士、1993年に2級建築塗装技能士の技能検定に合格した。以降現場の管理にも携わるようになり1996年には職長教育を修了した。塗装技能についても引き続き研鑽に励み、1999年には1級建築塗装技能士、1級鋼橋塗装技能士ともに合格し、名実ともに一級の塗装技能者となった。2008年には塾達した作業能力と豊富な知識により現場をまとめ、効率的なマネジメント能力に優れた上級職長として登録建設塗装基幹技能者の資格認定を受けた。

同君はこれまでに培ってきた高度な技能・技術により、配置された現場において、施工計画書・施工手順書をよく理解した上で監督や関係業者と密に打合せを行い、工期内に現場を引き渡すことができる。長年における経験と日ごろの研鑽により、使用材料の塗付量や乾燥時間から次工程をよく考え、最適な塗装工具・塗装方法を選定することに長けていることもその一因である。また、仕上げ面においても是正や補修の指摘を受けることが無く、常に高品質な仕事を納めている。

新しい材料が出ると試験施工・研究に勤しみ、多彩色塗装においては特に綺麗に仕上げる実践的な練習を重ねるなど、自己研鑽に余念がない。その結果、施工現場では発注者からの満足度も非常に高い。

また、日ごろから現場で後輩の安全・塗装指導もよく行い、資格取得における指導も率先して行っており信頼も厚い。指導を受けた後輩の8人は試験に合格し、いずれも所属会社の職長になっている。また、現状に甘んずることなく、塗装における新工法・新工具などの知識を取得し、後輩へ指導している。勤務態度も大変よい上、ボランティアの清掃活動・奉仕活動にも積極的に

参加しており、多くの後進達の見本となる人物である。
よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

鈴木 淳君

ALC パネル工事における施工品質と安全の追求及び他の技能者への水平展開に関する貢献

鈴木淳君は、25年にわたり ALC パネル工事技能者として業務に精励してきた。同君の父親も同工事技能者で、同君は幼少のころからその環境に触れ、品質への思いを受け継いできた。

また2年前からはそのキャリアを活かして、東海地区の ALC 工事主力店である（株）ロイカで ALC 施工を熟知した ALC 工事管理者として業務にいそしんでいる。

同君は職長技能者として、三重県四日市市の大手電子機器メーカー工場をはじめ大手化学メーカー工場、大型ショッピングセンター、遊技施設などの ALC パネル工事に従事してきた。とりわけ2015年の名古屋市の大型ショッピングセンター工事では、職長技能者として約50名の同工事技能者を束ねて工事をリードした。同物件は意匠性が高い設計で、外壁が曲面になっている箇所や同じ面で ALC 3メーカーの意匠パネルを1枚ずつ交互に張り分ける箇所があり難度の高い工事であったが、同君は工期と品質との両立を見事に達成した。この業績は受注者も大いに評価し、同君はこの現場で特別優良職長「匠」として表彰された。

同君は1999年に技能検定である「エーエルシーパネル施工技能士」の資格を23歳の若さで取得した。

同君は「きれいな仕事をする」「将来に残るものを作る」「誰に見られても恥ずかしくない仕事をする」をモットーに職長技能者として技能者を率いてきた。また現職の工事管理者としては職長技能者で培った経験も踏まえ、品質のみならず安全確保にも重きを置いており、「できないものはできない」ときっぱり断り、「危ないことはさせない」「技能者にケガをさせない」よう努めている。この姿勢に対して協力会社も受注者も同君に一目を置いている。

上記のように、同君が ALC 業界の発展に貢献した業績は極めて大きい。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

山口 雅人君

塗装工事における人的ネットワークを基礎とした緻密な施工管理による貢献

山口雅人君は、入社以来建築改修工事に伴う塗装及び塗替え工事に20年従事しており、2004年以降は建物外壁改修チームの専属技術者として、2013年からは社内検査員の一員になり、受注工事マンションの現場にも赴き仕上り状況を確認できる、同君の就業する会社では数少ない腕前の持ち主の一人である。1級塗装技能士（鋼橋塗装）、登録建設塗装基幹技能者、建設マスターの資格を所有し技能には定評がある。

同君は技能もさることながら、工程管理にも長けている。1週間単位で綿密に工程を立てて天候の影響や工事の遅れなどをつぶさに把握し施工の合理化に繋げている。加えて人的ネットワークを密にし、連絡事項などの漏れを防ぎ工程に遅れが出ないよう気を配っている。

社内の現場全体会議の統括責任者にもなっており、会社が請け負う現場全体を対象に、ここでも技術者の偏り・連絡調整の遺漏がないように確認を徹底している。例えば、年配の技術者と若年技術者の橋渡し役としても活躍している。昨今はコミュニケーションを苦手とする若年技術者も多いことから若年技術者のコミュニケーション不足や経験不足を補うために熟練の職人をバランスよく配置し、仕事に滞りやトラブルが発生しないよう配慮している。万一、トラブルが発生

した場合は誠実にその対応を行い人格的にも優れ、人望も厚い。

また、安全衛生にも精通している。特別教育や安全衛生教育を修了しており、自分だけでなく後進の指導においても特に安全対策・告知については徹底している。入社以来 15 年以上無事故を継続中である。後進には自分たちの仕事は命に係わる仕事であることを深く認識させ、決して事故を発生させない決意のもと日々仕事に携わっている。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

坂田 弘明君

建築工事現場における仕上げ品質の向上と安全管理に対する貢献

坂田弘明君は、2012 年に 1 級建築塗装技能士、2019 年に登録建設塗装基幹技能者の資格を取得した。長年にわたり建設現場で高度な技術・技能を生かしその能力を十分に発揮している。実務経験も豊富で、ゴンドラ特別教育、高所作業車運転、足場の組立て等の専門資格の他に、職業訓練指導員、職長教育修了及び衛生管理者等の施工現場の責任者として必要となる資格も取得しており、大型建築工事の施工現場を管理し取り仕切っている。

工事实績では、官公庁の工事の他、民間の工場や施設の改修等多種多様の塗装工事に携わり、社内外ともに多くの信頼を得ている。一例を挙げると、ある大型建築工事において一昨年と昨年にとり、発注者の協力を得ながら、型枠・左官・塗装の 3 者により外部の仕上がりをよくするための研究・検証を重ねてきた。特別に試験体を製作し各専門職の技術者と協議して仕上がり状態の確認を行うなど、同君が取りまとめ役となり、速やかな現場進行に貢献した。

現在は施工現場の代理人として数多くの現場をこなしながら、経験の浅い後輩のみならず、協力業者の作業員にも施工指導を行い、会社全体の発展に貢献している。常日頃から、施工現場で意見交換などのコミュニケーションを図り、周囲からも絶大な信頼を得ている。施工現場では、危険な高所での作業や粉塵が舞う中での劣悪な現場での作業も多いが、的確な作業指示と危険予知活動により、自身の施工現場での無事故期間は 20 年を超え作業員の安全の確保に貢献している。近年、近隣の学校で塗装奉仕の活動にも積極的に関わり、職業訓練の一環として塗装指導も行い、周囲の関係者や顧客からの信頼も厚く、地元の業界と会社の経営に貢献している。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

技能賞

瀧野 雄太郎君

塗装工事における的確な工法選択による工期短縮の貢献

瀧野雄太郎君は、塗装技術を身に着けるべく高校卒業後、現在の就業先である塗装会社の門を叩いた。その後、一貫して塗装の道を歩み続けている。2002 年の有機溶剤作業主任者を皮切りに塗装業において取得しておくべき資格はほぼ取得済である。1 級塗装技能士（建築塗装作業）、1 級塗装技能士（鋼橋塗装作業）、登録建設塗装基幹技能者、1 級建築施工管理技士等の資格を所有し技能・技術に関する内外の評価も極めて高く優秀である。その一例としては大規模修繕工事の施工中において、雨天が続き、工期が延びる可能性が高かったため、外壁塗替え工事の施工仕様を監理者と協議し承認を得て、従前より耐候性の高い塗料に変えると共に仕上げ塗りをローラー工法から吹付け工法に変更した。吹付け工法はローラー工法と比較し施工能率が高く、塗装工程にかかる日数を大幅に短縮できるだけでなく塗装工の技量が仕上げ品質に影響するローラー工法と比べ、吹付け工法はバラ

ツキや塗りムラが出にくい。これにより工程を大幅に短縮でき、居住者の負担を最小限に抑えることができた。同君の技術に裏打ちされた臨機応変な対応が活かした一例である。

同君は社内の後進育成にも積極的に努めている。建築塗装技能士の資格取得を目標とする技能指導を行いこれまでに1級塗装技能士を2名、2級塗装技能士を2名、計4名を誕生させ、親切丁寧な指導には定評がある。

また、現場においても作業手順と養生方法等の手順書を作成し、説明会・検討会を随時行い、その都度後進へアドバイスを送り意思疎通を図っている。そうすることにより大過なく安全で効率的に仕事が出来ている。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の技能賞を贈るものである。

論文奨励賞

山本 正人君

有機系下地調整塗材と外装タイル接着剤張り工法に関する研究

山本正人君は、これまで外装タイル張り仕上げの品質確保ならびに剥離防止性能を高めるための研究を行ってきた。特に、今回の研究業績である「有機系下地調整塗材と外装タイル接着剤張り工法に関する研究」では、外装タイル張り工法において、下地の不陸調整層とタイル接着層全体を有機系弾性材料で構成するタイル張り技術に関して評価を行い、論文発表するとともに、その技術は本会の2018年技術賞として表彰されている。

有機系接着剤による外装タイル張り工法は、接着剤層が高い伸縮性を有し、接着界面に発生する応力を低減できることから、タイルの剥離防止性能の高い工法として普及が期待されていた。一方、有機系接着剤でタイル張りを行う場合でも、コンクリート下地の不陸に対しては、伸縮性に乏しいセメントモルタルで調整するのが一般的であり、接着剤張りの剥離防止性能を十分に発揮できない懸念があった。この課題を解決するため、同君は有機系下地調整塗材という新たな材料概念を導入し、下地調整材とタイル張付け材全体を有機系弾性材料で構成するタイル張り技術について研究開発を行った。

本研究において、有機系下地調整塗材として、有機系接着剤と同じ変成シリコーン樹脂を主成分とした材料に対し、コンクリート壁面の不陸調整作業におけるこて塗り作業性を高めるため、粘性及び揺変性の調整を行った。その結果、垂直面への塗布性とコテ伸び性が一般的に使用される左官用モルタルと同等であることを確認した。

有機系下地調整塗材の皮膜物性（引張強さ・伸び）及び、有機系下地調整塗材を下塗り層に設けたタイルの接着強さについては、JIS A 5557（外装タイル張り用有機系接着剤）の基準を満たすことを確認した。また、本工法のタイル張り層についてのゼロスパンテンション試験では、有機系下地調整塗材を含むタイル張り層全体が下地材のひび割れに追従し、有機系下地調整塗材を下塗りした場合にひび割れ追従性が向上すること、さらに、日射や温湿度変化による繰返しのひずみ履歴を想定した耐疲労性試験では、接着層に発生するせん断応力が有機系下地調整塗材を使用した場合に小さくなり、疲労60年相当後も十分な接着性と変形追従性を有することを明らかにした。

以上のように、同君はセメントモルタルに代わる有機系下地調整塗材を新たに開発し、これを下塗りに用いた外装タイル接着剤張り工法について性能検証を通じて接着耐久性、変形追従性に優れることを実証し、工法の確立を行った。本工法が先鞭となって業界内で追従が進み、有機系下地調整塗材については、日本接着剤工業会規格 JAI 18（外装タイル張り用有機系下地調整塗材）として標準化されている。タイルの接着耐久性と剥離防止性能を高めた本技術は今後の更なる普及が期待され、品質の確保とともに、長寿命で安全安心な社会資本形成に寄与するところが大きいと思料される。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の論文奨励賞を贈るものである。

論文奨励賞

中田 清史君

屋外曝露試験によるコンクリート内部の水分状態に及ぼす仕上塗材の影響に関する研究

中田清史君は、「屋外曝露試験によるコンクリート内部の水分状態に及ぼす仕上塗材の影響に関する研究」において、屋外曝露したコンクリート内部の温湿度を測定し、各種仕上塗材がコンクリート内部の水分状態にどのような影響を及ぼすかを比較検討している。また、コンクリート内部の水分状態の傾向や変動要因を明らかにするとともに、鉄筋腐食環境との関連性についても検討を行っている。

近年、鉄筋コンクリート造建築物の耐久設計、耐久性評価において、コンクリート中の水分状態と鉄筋腐食環境をいかに関連付けるかが重要なテーマとなっている。多くの研究機関が、実構造物におけるコンクリートの水分状態に関する知見を公表しており、これらの知見はコンクリートの水分状態と鉄筋腐食を関連付ける契機ともなっている。同君も実構造物の調査結果を取りまとめ、鉄筋コンクリート造建築物の耐久性に与える仕上材、環境条件、コンクリートの水分状態等の影響について検討してきた。しかしながら、従来の研究では、解体直前の実構造物を調査対象としていることが多く、水分状態の測定期間や測定位置が限られ、データの完全性という意味では不十分な場合が多かった。また調査建物の使用材料や履歴が不明な場合が多く、データの普遍性についても課題があったと言える。

このような背景から、同君が所属する（国研）建築研究所では、各種仕上塗材を施したコンクリート試験体に小型温湿度データロガーを設置し、これを用いた長期曝露試験を実施している。試験では、仕上塗材（防水形複層 E、薄塗 E、なし）、外部環境（北海道、茨城県、沖縄県）、かぶり厚さ（10、30、50mm）を試験因子とし、それぞれについて年間を通して内部温湿度の測定を行っている。同君はこの測定結果をもとに、降雨や乾燥に対するコンクリート内湿度の応答が、仕上塗材ごとに異なることを定性的に示すとともに、鉄筋腐食が生じやすい条件について検討を行った。また、コンクリート内の湿度変動メカニズムについて考察し、コンクリート内の湿度変動要因について、水分の出入りだけでなく温度変動も考慮に入れる必要があることを明らかにした。さらに、同時期に曝露試験を開始した鉄筋入り試験体について、曝露開始から1年経過時点での鉄筋腐食状況についても報告した。

以上の研究成果は、標準的な試験条件の下で得られた結果であり、一般環境下の鉄筋コンクリート造建築物におけるコンクリート内部の水分状態を論じるうえで、参照されるべき基礎データである。また、仕上塗材による耐久性向上の可能性を、コンクリート内の水分状態という観点から検討している点は学術的価値を有する。上記と並行して鉄筋を含む試験体の曝露試験も行っており、コンクリート内部の水分状態と鉄筋腐食の関係の解明に資する知見が今後期待される。

よってここに、日本建築仕上学会学会賞の論文奨励賞を贈るものである。

修士論文賞

曾 明耀君

RC 建築物の耐用年数に及ぼす仕上塗材の躯体保護効果

本研究は、RC 造建築物の外装に用いられることの多い建築用仕上塗材による中性化抑制効果について検討している。簡易的な試験方法を用いて測定した、各種の仕上塗材における二酸化炭素透過性および透湿性と中性化率との相関性を明らかにするとともに、試験条件の影響についても精緻に検討を行っている。さらには、各種仕上塗材の経年劣化や補修・改修による影響についての検討を踏まえて、RC 造建築物の耐用年数の試算結果を示している。コンクリートの中性化を踏まえた、仕上塗材の選定に応用可能な知見を得ており、高く評価できる。また、仕上塗材の経年劣化の程度を測定し、仕上塗材の透過性を用いた中性化抑制効果の評価を行い、経年劣化や補修を考慮した仕上塗材の躯体保護効果の予測を行っている。RC 建築物の長寿命化のための有用な知見を得ている。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

修士論文賞

中垣 琴葉君

帯電した建築材料の花粉吸着性能及び再飛散防止性能に関する研究

本研究は、長きに渡り、社会生活にも影響を及ぼしている花粉症対策の一環として、建材特性の観点から取り組まれた新規性がある課題であり、かつ室内住環境改善の根本に関わる重要な検討がなされている。著者は、開口部付近の建築材料に花粉の吸着性能及び再飛散防止性能の付与を試み、建築材料と関連付けた解決策を提案したものである。開口部や水切りに使用されるアルミニウム板・ガルバリウム鋼板・塩化ビニル樹脂板を帯電させ、素材の違いによる表面電位と吸着性能の違いを明らかにした。感染症対策により換気の重要性が増しているなか花粉の飛散最盛期に換気による室内への花粉の流入は重大な問題であり、また、建物を作る立場・使う立場の両方のニーズに深く寄り添う意識が感じられ、今後の若手技術者の研究開発に関わる大きな礎を本人の中に築けていると思われた。今後の活躍も大いに期待できる成果だといえる。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

修士論文賞

東 優太朗君

コンクリートの凍害劣化性状に及ぼす遷移帯の影響

本研究は、コンクリートの凍害劣化メカニズムを明らかにするため、コンクリート中の遷移帯空隙量の異なる試験体に対して行った促進凍結融解試験結果と、ひび割れの画像解析により、遷移帯が凍害の劣化性状に及ぼす影響について実験的に検討したものである。凍結時に遷移帯に作用する Cryosuction pressure を中心に、その作用をモデル化し、調合や凍結時の最低温度によらず、凍結時の遷移帯の寸法変化で整理することで劣化性状を予測できることを示している。本論文は、コンクリートの凍害劣化メカニズムの解明に貢献しており、工学的価値の高いものといえる。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

修士論文賞

小笠原 直哉君

スマートフォン内蔵カメラを用いた屋内空間の簡易二次元復元手法に関する研究

本研究は、建築物の維持管理の一環として、経年における劣化情報の記録にあたり、スマートフォン内蔵カメラを活用し、レーザースキャナ等による方法に比べて低コストで簡易な屋内空間の三次元復元手法を検討したもので、自らの提案による「隅角部を対象とした円弧撮影法」によって撮影精度の向上が図られている。既存建築物に対する図面情報の作成は、補修・補強等を行う上で必要不可欠であり、ニーズの高い研究である。スマートフォンと無料のソフトウェアを利用して簡易的な手法によって図面化出来ることを明らかにした点は、実務的にも有意義である。建築ストックの有効活用において、特殊な技能や機器を要しない維持管理情報のデジタル化および BIM を活用した包括的維持管理システムの構築に寄与すると考えられ、研究の独創性や発展性が顕著に認められる。一方で、事例が少なく一般論として成立するかの判断ができない点もあり、今後の展開に期待したい。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

修士論文賞

鈴木 実佳君

ウレタンゴム系塗膜防水層のトップコートの耐疲労性

本研究は、開発した疲労試験法を用いて、ウレタンゴム系塗膜防水層の疲労試験をおこなうとともに、解析を実施して、トップコートを含む塗膜層の耐疲労性を評価・分析した研究である。従来は、防水材料単体で評価されることの多かった耐疲労性評価において、トップコートの有無や紫外線照射の有無が影響を及ぼすことを明らかにし、その知見を丹念に検証している。トップコート・防水材料の厚さ、トップコートの硬さなどの要因が防水層の耐疲労性に及ぼす影響を段階的に追求し、最終的に、トップコートの耐疲労性は、これらの要因にかかわらず、トップコートの伸び率にほぼ依存するという汎用的で明快な結論を導き出している。これらの知見は、実際の塗膜層における観察結果と整合するものであることから、工学的に高い有用性があり、修士研究として高い水準にあるものと評価される。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

修士論文賞

錦木 健二君

フライアッシュのコンクリート用混和材への利用拡大に関する研究

本研究は、フライアッシュのコンクリート用混和材料としての利用拡大を目的として、フライアッシュを使用したコンクリートの諸性能を膨大な文献調査および実験から明らかにしている。さらに、文献調査や実験から得られた豊富な知見をもとに、フライアッシュを使用したコンクリートの諸性能や設計法について検討している。多数の文献調査、モルタルやコンクリートの性能試験や強度寄与率の検討、モルタル供試体による腐食実験、最適な設計法の提案など多岐にわたっている。これらをもとに、強度寄与率を用いた推定式による長期強度の増進、仕上げ材料の使用を含めた環境条件に基づく耐久性評価などを着実に立証している。その工学的な有用性は極めて高く、修士論文として高く評価できる

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

修士論文賞

渡辺 恭子君

端島環境下における亜硝酸リチウムによる鉄筋腐食抑制方法に関する研究

本研究は、端島（軍艦島）の RC 造構造物における適切な補修工法の実用性を勘案して、亜硝酸リチウムによる鉄筋腐食抑制効果の持続性を、実験室における散水実験および塩水による乾湿繰返し実験、ならびに現地における暴露実験によって検討したもので、亜硝酸リチウムとシラン系含浸材の併用による効果を確認し、その耐用年数の予測手法や修繕周期についても提案している。この成果は、RC 造構造物の維持保全技術の開発に寄与すると考えられ、研究の独創性や発展性が顕著に認められる。シラン系表面含浸材を併用した場合、高い鉄筋腐食抑制効果を維持できること、既往研究の知見を加味すると、本手法を適用した場合の端島環境下における耐用年数は 9 年となり、塗布後 9 年を目安に再塗布を実施することが有効な維持管理サイクルであること等、有用な知見を得ている。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

修士論文賞

宮部 あづさ君

高強度コンクリートの爆裂現象における含水状態と鉄筋拘束の影響

本研究は、高強度コンクリートの火災時における爆裂現象の発生メカニズムを明らかにするため、中性子ラジオグラフィを用いた水分分布を把握するとともに、鉄筋による拘束の影響を明らかにしている。中性子ラジオグラフィを用いて、従来では精緻な測定が困難であった加熱時におけるコンクリート中の水分分布を定量的に把握し、爆裂が生じやすい含水率、爆裂位置付近における水分状態、爆裂前後の水蒸気圧の挙動、鉄筋拘束の影響を検討している。これらの結果より、含水状態および拘束条件の異なる高強度コンクリートにおいて、水蒸気圧が爆裂現象に与える影響を明らかにした。爆裂発生メカニズムの解明に貢献し、爆裂現象の発生メカニズム解明に向けた示唆に富む結果を示しており、高いレベルにあると評価できる。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

修士論文賞

川口 莉穂君

センシング技術を用いた非構造建築部材の定量的評価手法の提案

本研究は、外装タイルの定量的な剥離検知手法として、2つを提案し、実験・検討を行っている。まず、災害時における即時の安全性確認を目的とした光ファイバセンサを用いた連続的なひずみ計測による剥離検知についても可能性がありそうである。また、2つ目は、定期点検の簡易化・自動化を目的とし、音解析による剥離検知手法の検証、定量的な剥離評価を行っている。ひずみ計測手法によって外力および熱負荷による剥離を検知できる。剥離が生じると、ひずみに不連続な

挙動が現れ、タイルと躯体のひずみにひずみ差が生じる。一部の知見についてはこれまでも研究されてきた内容ではあるが実験がよく整理されておりこの分野の研究として評価できる。実験室レベルの試験に加えて、実大振動実験および実建築物における実証実験を実施しており、実務に役立つ成果を挙げていて、論文の完成度が高い。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の修士論文賞を贈るものである。

卒業研究賞

菅井 新太君

SDGs 時代における建築廃棄物処理適正化に関する研究
～アンケートによる実態調査を中心として～

本研究は、昨今注目されている SDGs について、建築関連企業を対象とした、SDGs の認知度や取り組み状況、環境活動の把握と環境負荷を考慮した建設廃棄物処理についてのアンケート調査の結果をまとめている。建築関連企業として、建築生産系企業と廃棄物処理企業に大別して調査を行い、建築産業の水上から水下に至るそれぞれの企業の取り組みを明らかにしている。時宜を得たテーマであり、卒業論文としては高いレベルにまとめていることが評価できる。企業の SDGs 認知度と取り組み状況には深い相関があること、SDGs の取り組みを促進するためには、業種や規模に適した情報を提示していくことが効果的であること、建設廃棄物ごとの CO2 排出量原単位を示す等、有用な知見を得ている。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

高間 健太君

仮設足場用養生シートの色による内部空間の改善

本研究は、修繕工事現場の仮設足場用養生シートの色に関し、一般的な黒色のシートでの施工業者の熱中症リスクや鬚髯工事期間中の居住者の圧迫感を指摘するとともに、裏面を視認性確保のため黒としたまま表面を白色とするシートの使用を提案したものである。被験者実験に基づき、効果を詳細かつ定量的に検討した。既存建物の修繕工事の需要が増えていくことが予想されていることから建設業界に多大な貢献が期待できると思われる。

テーマ自身が、現況の建設現場において潜在するまだ顕在化していないような課題に着眼しており、かつその評価対象材料が、現在使用されている一般的なシート色に加え、上記性能の改善性が期待できそうな表裏で白黒が相違する種類も加え、新たな仮設資材による環境改善効果について言及している点が非常に興味深い。建設副資材に関係する作業環境や住環境の改善性に関わる価値のある検討がなされている。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

住本 賢志君

骨材が遷移帯形成に及ぼす影響とナノインデンテーション法を用いた弾性率

本研究は、3種類の骨材（ガラスビーズ、硬質砂岩、石灰石）を用いた場合の、骨材とセメントペーストの間にある遷移帯周りの弾性率を、ナノインデンテーション法によって求め、それぞれの骨材が試験体の強度にどのような影響を及ぼしているのか考察したものである。統計的な分布状況から、遷移帯の弾性率の傾向や大きさや骨材から十分離れた部分のセメントペーストの弾性率との比較や、元素マッピングによる各元素の充填率と弾性率との相関の有無などの考察を行い、多数のデータを蓄積している。

また、その結果として、骨材種類によって遷移帯の形成状況に差異が生じることなどを示唆するデータを得ている。以上のように、本論文は、コンクリートの基礎的な物性の解明に資するものといえる。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

北林 崇君・辻 峻人君・齋藤 毅君・恒成 泉君
土壁の仕上げにおける引きずりに関する研究

本研究は、数寄屋建築や茶室の外壁または塀などの土壁仕上げに用いられている左官による引きずり波模様について、左官工の経験や技能による模様の相違を、材料の調合および鏝の種類を要因として実験し、波模様の長さ・間隔の定量化や図解によって検討したものである。この成果は、波模様の形成メカニズムの解明や左官技能・技術の修得ならびに伝承に寄与するものと認められる。左官職人へのヒアリング調査では土がちや砂がちの調合に対する注意点、施工実験では引きずり仕上げの施工手順を整理している。また、鏝裏の目視観察から、丸鏝の曲率に対応して引きずり時の表面の荒れ方が変わることを見出し、引きずり試験体の波模様の特徴の計測方法を検討し、引きずりの波模様の長さ・間隔に対応する波模様の発生メカニズムの手がかりを示している。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

長塚 友汰君
建築外装仕上材の中性化抑制効果の評価方法および評価基準の提案

外装仕上材の中性化抑制効果を考慮し合理的な耐久設計を行うことは、鉄筋コンクリート構造物の耐久性向上とその実現のために重要なテーマである。改良ボックス法が提案された上で、建築研究所、日本建築仕上材工業会等の共同研究者らと協力しながら18種類の仕上材について、中性化抑制効果の検証をしている。これは独自の実験であり、これらの相当量の試験を適切に行い、結果をとりまとめている。10cm角程度の小型のボックスでの簡易試験のデータとの関係を定量的に示し、10日間程度で評価を可能とした。本研究は、JIS A 6909(建築用仕上塗材)の改正、長期優良住宅の認定基準の合理化の検討とも連動し、実務的なインパクトの大きい成果となっており、本賞を贈るにふさわしいと評価される。

また、既往の研究に関する文献調査の結果も踏まえて、二酸化炭素透過度によって中性化抑制効果を評価する考え方を提案し、評価基準として二酸化炭素透過度 $0.25\text{mol}/\text{m}^2\cdot\text{day}$ 以下が妥当であることを示している点は今後の実務上の知見に有用であり、評価したい。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

坂井 青葉君

遺産的建築物における高品位木摺漆喰天井の漆喰部力学抵抗性および剥離性状

本研究は、文化財建造物の保存・再生技術の研究の一環として、非構造天井部材の地震等における剥落安全性の観点から、国会議事堂の木摺り下地漆喰塗り天井について、施工当時の工事仕様書等から材料および工程を調査し、木摺りの断面形状、漆喰の充填深さおよび調合の違いを要因とした要素試験体を用いて、付着特性やせん断特性を評価したものである。この成果は、木摺り下地漆喰塗り天井の保存・再生手法の提案までには至っていないが、研究内容、論文の表現および論理性において、有益な情報と認められる。

漆喰天井に関してヒアリング、文献調査等によって当時の材料・施工の詳細が綿密に調べられており、建築当時の材料や技術を知る手がかりとして、非常に価値の高い研究である。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

沖宗 律子君

内装壁紙の紫外線劣化による変色と清掃用薬剤の関係についての研究

本研究は、代表的な内装仕上材料であるビニル壁紙を対象に、清掃で使用する薬剤の種類とその後の紫外線照射の複合作用による変色について、実験的に明らかにしたものである。清掃の影響については、実用上は必要な点であるにも関わらず、これまで評価されてこなかったが、これらの影響について、薬剤種類、壁紙の色、紫外線の照射時間等との関係が明らかになっている点を評価した。また、紫外線の照射装置について手作りで創意工夫されている点も評価できるが、促進倍率（照射時間に相当する実時間の関係）については、単純に紫外線量だけで決まるものではないため、今一度既往の研究等で変色に関する勉強をして頂いてから適切なアプローチに洗練されることを期待したい。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

和田 健四郎君

浸水害を想定した建築用断熱材の乾燥速度分析

本研究は、近年多発する浸水害の被害低減を目標に、断熱材の乾燥特性を実験的に明らかにしたものである。断熱材の種類、乾燥面の条件（透湿防水シートの有無）、乾燥面の向き（水垂れを考慮し上向きと横向き）、浸漬時間が初期含水率や、800 時間後（33 日後）までの乾燥速度に及ぼす影響を定性的に明らかにしている。この成果は、今後の適切な材料選定やそれを通じた浸水被害の低減及び復旧につながり、基礎的な情報になると言える。

実験では、断熱材の使われ方を想定して、断熱材の種類や仕様の異なる模擬試験体を作製しており、また、浸水時間、乾燥面の向きを考慮した乾燥条件など、細かい水準の実験を丁寧に実施しており、含水率や乾燥速度に関する知見が得られている。願わくば、含水率の変化が断熱性能に与える影響まで評価がされていると、さらに有益な研究になると思われるため、今後の展開にも期待したい。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

真砂 哲也君

木目模様仕上げにおけるせき板の転用がコンクリート表面の仕上がり状態に及ぼす影響

本研究は、木製のせき板を用いてコンクリート表面に木目模様を転写する打放し仕上げを対象とし、せき板(杉板)の転用がコンクリート表面の視覚的な仕上がり状態に及ぼす影響を実験的に検討している。具体的には、杉板の表面仕上げおよび剥離剤の種類を因子として、分光測色計およびデジタルカメラを用いた木目再現性の評価を行っている。施工時の材料選定、仕様選定の参考となる有用な知見を得ており、卒業研究として高く評価できる。

コンクリートの表面色や、転写される木目模様の色彩パターン・形状などに対する杉板型枠の転用回数の影響が杉板の表面仕上げ方法ごとに定量的に把握されている。結論に至る過程がやや曖昧ではあるものの、実務上有用な知見がわかりやすく示されており、評価できる。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

浅葉 拓弥君

低アルカリ活性化モルタルに関する基礎的研究

本研究は、近年の環境負荷低減の動向が強まる中で製造時のCO₂排出量が懸念されるポルトランドセメントの代替材料として低アルカリ活性材料の実用化に向けて、その耐久性評価に着目して検討を行っている。実験の結果より、低アルカリ活性化材料は、自己収縮量、乾燥収縮量共に普通ポルトランドセメントと比較して大きいこと、促進中性化試験より、中性化抵抗性が普通ポルトランドセメントと比較して小さいことを明らかにしている。その結果、耐久性評価のうち、中性化抵抗性および収縮特性について、従来のポルトランドセメントに比して劣る傾向にあることを把握し、今後の低アルカリ活性材料の性能向上に向けた手掛かりを与えている。緻密な実験によって検討されており、卒業論文として評価できる。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業研究賞

今関 幹君・刀称 龍平君

建設分野におけるレーザーの適用に関する研究

本研究は、無振動、無反力、低騒音というレーザー加工の特長に着目して、レーザーによる鉄筋ケレンという新しい工法開発のための基礎研究である。既往の研究例が少ない中、独自の実験計画によって、ケレンの適用範囲、適用可能な条件などを検討している。その結果、対象物のガラス化条件と熱量の関係などの興味深い結果を得ている。物性、表面粗さ等の形状の両面からの分析をさらに丹念に進めることにより、今後の工学的な応用につながる進展が期待される。実験の結果より、鉄筋被覆に使用したモルタルにレーザー照射をした場合のガラス化の条件範囲を把握し、レーザー技術によるケレンが可能であること、また条件範囲が限定されることを明らかにし、今後が期待できる。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業研究賞を贈るものである。

卒業設計賞

三浦 隆哲君

エアロゲルの建築的可能性を探る

コンクリート建造物は現在現場打設、プレキャストを経て、デジタルファブリケーションの時代に入りつつある。ここで、絞り出すエアロゲルというスタイルで構法を提案している。誇大妄想的な点はあるが、技術的な調査を行っており、その上での検証に飛躍がありつつもデザインに取り入れている点については評価したい。ただし、こうした新しい視点をもった材料を独自のアイデアで設計提案に用いる場合、実現上の技術的課題については専門家のヒアリングを積極的に行ってほしい。今は、構造材や仕上げ材といった、建材の中でも部位・用途による使い分けがされるのが一般的であるが、本材料を扱う視点の中に、材料の性質によって、部位用途に限られない、ライフサイクル全体を通じて求められる建築への可能性を機軸に材料をコントロールする意識が強く注がれており、本作品がこのような設計動機を持てたことも評価できる。

よってここに、日本建築仕上学会奨励賞の卒業設計賞を贈るものである。

日本建築仕上学会

〒108-0014 東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階

TEL. 03-3798-4921 FAX. 03-3798-4922

[http://www. finex. jp](http://www.finex.jp) E-mail : [shiage@finex. jp](mailto:shiage@finex.jp)